Doc. 1940

(150)

Printed book:
What comes after
"Shanghai Incident"
~~and the Next problem = Amerim.~~

By. Kitamura, Kaichi.

P. April 5, 1932

P. p 286

#201

1440

1940

Analyze & send to me
CWP

What Comes After Shanghai Incident.
by KITAMURA, Kaitsu
published 10 April 1932

Table of Contents.

1. Protect Japan as a heroic character.
2. Substances and Causes of war between America and Japan
3. From destruction of subsistence to war
4. From boredom to war
5. Historical outlook of war
6. Relation between Financial Cliques (Zaibatsu) and war.
7. Horses, electricity and war
8. China as a war area.
9. Poverty, thieves and war.
10. New Manchurian Country
11. Defiant attitude of America.

Not official; I make opinion.
CWP

NO EVIDENCE

GENERAL HEADQUARTERS, SUPREME COMMAND ALLIED POWERS
INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Document No. 1940 13 June 1946

CERTIFICATE

I, William C. Grout, hereby certify th
that I am associated with the International Prosecution Section, General Headquarters, Supreme Command Allied Powers, and that the attached document, consisting of 286 pages and described as follows: "What comes after Shanghai Incident" by Katamura Kaichi ITAITSU

and dated 5 Apr 1932, was obtained by me on the date above set forth in my above capacity and in the conduct of my official business and in the following manner, to wit: (place and from whom obtained, including specific Japanese archives, records and files involved, if any)

ATIS: Lt John Coppin

William C. Grout
NAME

Investigator
RANK OR CAPACITY

1P.S.
ASN

7

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 1940 Date 6/15/46

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Printed book "What Comes after the SHANGHAI Incident" by KITAMURA, ~~KAICHI~~ KAITSU

Date: 5 April 1932 Original (X) Copy ( ) Language: Jap.

Has it been translated? Yes ( ) No (X)
Has it been photostated? Yes ( ) No (X)

LOCATION OF ORIGINAL (also WITNESS if applicable)

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: ATIS - 2nd John Roggin through Mr. Prout from Home Ministry Library of Prohibited Books.

PERSONS IMPLICATED: KITAMURA, ~~KAICHI~~ KAITSU

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE:

Advocation of war -- Japanese expansionism

SUMMARY OF RELEVANT POINTS (with page references):

"What Comes after the SHANGHAI Incident" 286 page printed book by KITAMURA, KAITSU published in April, 1932.

Contents:
1. Prefect Japan as a heroic character.
2. Substances and Causes of war between America and Japan.
3. From destruction of substance to war.
4. From boredom to war.
5. Historic outlook of war

Analyst: A. Goldstein Doc. No.

(over)

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 1940 Date: 18 June 1946

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Printed book - "What Comes After the Shanghai Incident" by KITAMURA, Keitsu.

Date: 5 April 1932 Original (X) Copy ( ) Language: Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (X)
Has it been photostated? Yes ( ) No (X)

LOCATION OF ORIGINAL (also WITNESS if applicable)

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: ATIS - Lt. John Hoppin through Mr. Front from Home Ministry Library of Prohibited Books.

PERSONS IMPLICATED: KITAMURA, Keitsu

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE: Advocation of war — Japanese Expansionism.

SUMMARY OF RELEVANT POINTS (with page references):

"What Comes After the Shanghai Incident" - 236 page printed book by KITAMURA, Keitsu, published in April 1932.

Contents:
1. Perfect Japan as a heroic character.
2. Substances and Causes of war between American and Japan.
3. From destruction of subsistance to war.
4. From boredom to war.
5. Historic outlook of war.
6. Relation between financial cliques (Zaibatsu) and war.
7. Horses, electricity and war.
8. China as a war area.
9. Poverty, theives and war.
10. New Manchurian Country.
11. Defiant attitude of America.

Analyst: Lt. Goldstein

Doc. No. 1940

上海事變とその後の問題

北條信

15061
Sack 4
301
1940
記號 AR 48
番號 2661
綱度
發禁

内務省警保局保安課

禁賣

上海事變の、その次の問題

北村佳逸著

改善社發行

序文

いつ東洋に平和が訪づれるかの問は餘りに素朴である、或は僕らの一代に平和を見ることはあるまい、バランスの回復されるまで僕らは千波萬波の中を泳いで暮すのであらう。

特異にして覆面的な勞農思想、變態にして消極的抵抗の強い支那の小我外交、歐洲が世界指揮の權能を離された末期、米國がこれに代るか否かの決定點、白人の眼に映ずる日本の小づら憎い横面、白人禍防疫線上に立つ日本、列國憎惡の中に反國家思想を一掃した日本意識、問題の總てに絡まる經濟の動き、そんな脈絡の有るやうで無いやうな問題を再吟味したものが、この本である。

本の中味は讀んだらわかることであるから、この序文一頁は紙と筆と讀む時間と書く時間との浪費であつた。

著者

上海事變の、その

次の問題

目次

その一　日本を英雄的人格に仕上げよ……一
その二　日米戰爭の原因とその本質……二三
その三　生活の破壞から戰爭へ……四四
その四　退屈から戰爭へ……六〇
その五　戰爭史觀……九四
その六　財閥と戰爭との關係……一二五
その七　馬と電氣と戰爭……一六五
その八　戰場としての支那……一八七
その九　貧乏と盜賊と戰爭……二二四
その十　滿洲新國家……二四三
その十一　米國の挑戰ぶり……二六六

上海事變の、その次の問題

北村佳逸著

その一　日本を英雄的人格に仕上げよ

A

生産品の滯積と僕らの需用とは何の交渉もない、切れ〳〵の全く別物である。人を貧乏にしておいて品物を買へといつても無理な話で、裸になるまで搾取しておいて織物を突きつけても貨幣の仲介なくしては一センチの布だつて賣つてくれないではないか、それを買へ買へないと爭ふのはナンセンスな押問答だ。生産品が國民の購買力を超えた時は、もはや資本家も利潤を得ることはできない、仕方がないから國外へ押出す、國外から押し返へす、どこも

こゝも商品で一ぱいである。必要な品物を運ることのできないほど生産物が溜つて人に使つてもらふための品物が人に使はれないで腐朽してしまふ、綿花栽培は肥料を得る目的ではないが綿花を埋めて肥料にする、コーヒの本質目的は煙ではないが焼き棄てゝしまふ。コーヒ綿花は天産物であるから多くとも自ら限度があるが、限度のないまで調子に乗つて造られるものは機械製品である。

どんな景氣が順環してきても、金が活潑に廻轉しても齒車の速度に及ばない、人間の需用を顧慮することなしに機械は廻轉するその結果は？　現代の資本組織を謳歌する學者たちは何とか御用辯護論を考へ出すであらうが、こゝまで詰つてから今さら學究的講釋を傾聽してはゐられない、現實から見て、**結論は割合に平凡だ、平凡だが物凄い、十年ごとに破壞せねばならぬ、破壞とは戰爭である、**戰爭は必要である。

B

洋服を新調した人が二三日して仕立屋に小言を持ち込んできた、相當に金をかけて作らせ

た洋服のポケットがすぐ綻びたといふ——それはマッチ會社の社長であつた。其ポケットには五十個も百個ものマッチを詰め込んだのであるから、ポケットの包容力以上のものを包容させた無理から出たもので生産量が消費力にオーバーした時には破綻は必然である。なぜもつと大きなポケットを作らなかつたかといふ不平は正しくない、それを二倍大にしたら彼れは三倍の生産物を詰め込むであらうから結果は同じことだ。人間の力で造るだけは人間の力で消費される自然法則であるが、供給の方には人間力以上の機械が働きかけてゐるに對して受身の消費は人間力だけで何の應援もないから堪へ切れなくなつた。ポケットのマッチが使用し盡されねば次のものは這入らぬ、**それまで不景氣は續く。**ポケットが空になつて暫くして必要の起るまで待たなければならないが、そんな時はマッチを製造する機械の總てをぶち毀しての後のことである。

背中にまで大きなポケットをつくつてマッチで身動きのできないほどの苦しい中から彼はハンドルを握つてマッチをつくる機械を急速に運轉してゐる。

機械の運轉を中止せしめてはならないといふ約束もないのに、何がために人類が機械に脅

かされて周章狼狽の痴態を演ぜねばならぬか、分配法を訂正しないで銘々に一ぱいの能率を機械に強いてゐる、慾から出た淺ましさである、慾は人を爭に追ひ込む。

こちらの國で生産の調節をしても、あちらの國で調節しなかつたら、こちらの國は破滅する。兩方とも調節しなかつたら兩方とも破産する。そこで戰爭となれば、どちらか一方が助かるから兩方とも潰れるより五割の得である。

地球上に國を成してゐるものは皆生きようとする。死ぬことは何でもないが生きて行くことは並大抵ではない。他のものを掠めて生きようとする種族もあり、土地が生存に適しないために悪いと知りつゝ盜まねば生きて行けない民族もある。かやうな民族には強いそして餘力ある國防を要する、國防とは居ながら守るだけではなく脅威を除くため進んで攻めるのもそれである、自衛權といふ體裁のいゝ名を考へたものは智恵がある。

C

自衛權は何を僕らに教へてくれたか……釋然として心を改めよ。

吾々は道德に憑かれてゐたのであつた、僕らが敎はつてきた傳統的倫理は、嘘をついてはならぬ、人を愛せねばならぬと、信と愛とが全身に絡みついてゐた。信愛すると、しないとは自分の權利であるものを、どう間違つたものか、それを守ることが義務であるとして育てられてきた。

他人を信愛する、それはいゝことだ、だが、それは自分の權利である。他人が自分を信愛せよと僕らに命令する權利はないはずである、日本が米國から信愛を強いられる義務のないのと同じことである。

信愛は交際の基調であるが移民を拒み、排日をやり、關稅壁を築いて他國の商品を突きかへす、その相手に向つて信愛のスマイルをもつて打つてかゝることは道德に囚はれた憐れな友人である。友人ではない、ことによつたら隷屬である。彼れは日本をして自分を信愛せしめる命令權を持つてゐる、なぜならば歷代の外交官が信愛權を捧げたからである。

彼れは精神的に貢を要求する、國際會議の開かれるごとに日本は信愛稅を仕拂つてきた。これは信愛でも何でもない、むろん正義でもない、もし僕らはそれに代るべき適當な言葉

を見出すならば早速それを使ひたいと思つてゐるくらゐだ。

信愛は國際的に仕譯られる、支那に對してはこれだ、日本に對してはあれだ、英國に對してはそれだ、共通のできない信愛である。

世界主義とモンロー主義、國際主義と東洋主義、主義にも地理的區分がある。建國の精神が違つたら國によつて道德の解釋を異にする、大和魂、ヤンキー魂、ジョンブル魂、魂にも國籍の堅い殼をもつ、榮螺のやうな魂であるが、榮螺より強い人間が漁獲して、その殼を利用して壺燒としたら國粹の堅城も割合に脆い、だから引込み思案はよろしくない。

正義と、一口に、何でもないやうに手輕に取扱はれてゐるが、正義の本體は何から構成され、どんな働きを爲し、どんなことを要求するかの研究に就いては、これまでの道德家の下した定義に對して僕は抗議する、分析せねば氣が濟まない科學時代に、こればかりは神秘な丸藥として丸呑みに呑み込んでゐる人の心が僕にはわからないが、それを論究するのはこの文の本旨ではないから米國製の坊間正義で、正しい本質を捉へることなしに筆を進めることにする、たゞ知つて置かねばならぬことは正義は時と處と人とによつて正體を變へることで

ある、眼前の正義は明日の正義ではなく戰場の正義は敎會の正義でなくラテンアメリカ人の正義は北米合衆國の正義ではない、從つて合理的でなく機會的のものである。

D

兩虎相鬪ふ、どちらも正義であり又どちらも正義でないともいへる、日本の正義と米國の正義と太平洋の眞中で衝突した時に、どちらかゞ墜落する、勝つた方が正義であるとは道德的に斷定はできないが負けた方が不正義であると實力主義では押し通せる。

正義といふインチキ道德の片割れに、も一度強力な探照燈を浴せてみやう。

彼は強いて我に正義を守れと命ずる、たゞ正直にそれを守つてゐたら、どんな目に逢ふかも知れない、國家でいへば衰亡にまで突き落される。神さまの中に貧乏神が交つてゐるやうに道德の中に怪しからん正義が交つてゐる、正義は敎へる、平和が續く時は國民の進化が滯する、この藥を飲め！　この藥とは急激な下劑である、戰爭で滯貨を一洗して新鮮な活動物を送り込めといふのだ。

人生五十年の生涯の中で戰爭又は戰爭準備は重要な用事の大部分を占める、戰爭は又歷史の重要な頁を塞いでゐる。衞生、保健、育兒などは建設的であるともいへるが戰爭はその反對の仕事をして、一の戰爭には少くとも十年以上の準備を要するから文明人の一生は殆んど戰爭を絶緣する暇はない。戰爭は人間生活の最も飛躍した頂點であると同時に經濟的にも週期ごとに通過せねばならぬカストムハウスである、この稅關で血の沐浴をする。

一國の利害と全人類の利害とは相一致しない、國家を超越した全人類の福祉が果して存在するものとせば、たとへば軍備の全廢といつたやうな案が、なぜ國際會議の基調とならないであらうか。そんなことをしては資本主義國家が私利を圖る餘地がないからであり社會主義國家だつてその行はれないことを知つて資本主義國家の結束を亂さうとする戰術であり、どちらも權謀であつて正義ではない、正義は却つて軍備擴張の中にその回答を求める。

戰爭は詰らないといふ、これは採算から出た詐らざる聲のやうだが、その實は詰らないことはない、勝つたら割に合ふ社會活動であるがゆゑに千年も二千年も前から強い民族的支持を受けて、今でも、將來にも尖端は愈々尖る。

E

小學校時代から席次で競爭する。上級學校の入學試驗で、就職で、排他力は發揮し滿身みな攻擊である。日本のやうな土地の狹い人口の多い國は、さうでなくては生活の市街戰に勝つて生きて行くことができない、政黨の下積から幹部にのし上るに何人かを蹴飛ばして進まねばならぬが、これは資本主義國家も社會主義國家も共通の不道德生活である。人民委員になるまでにどれだけの競爭者を突落さねばならぬか、百萬長者になるまでに何百人の人を破産させねばならぬか、代議士でも大臣級になるまで何人の相手を落選させたか、財閥を築きあげるまでに何萬人のルンペンを造つたか、大將になるまでに何萬人を殺したか、英國が今日の大を成すまでに何度の大戰を經てきたか、又た今日の大を維持するに將來に何度の大戰を經過するであらうか。彼れは島國で市場、原料の擴大を要したから歷史に花々しい戰爭の記述を殘してその目的は達せられた。**もつと突込んで說明することもできる**、文明の大國家となるまでに戰爭は主要な發展力を成し、その代價、その智慮、その重大さにおいて國家主

要機能の何物も戰爭に及ぶ活動はない、歴史に現はれた人物はみな競爭の優者であり征服者であるが、特に武人に至つては道德心の薄さと、位地の高さと、敵を殺した數とは脈絡を引いてゐる。

戰爭が偶然の原因によつて誘發されるものとするのは誤りであつて僕らが三歳の幼稚園時代のランニングから死に到るまで身中に蓄積せられた規則的出來事である。それを突然に競爭をやめよ戰爭をやめよといつたとて今さらやめられるものではない、なぜならば今日のやうに競爭が激化しなかつた時代には運命といふ、人間ではどうにもすることのできない無形の力の命ずるまゝ從順に服從してゐても生活はできないことはなかつた。しかし僕らは運命の魔流に逆つて世を渡つてきて、文化といふ何人の力でも醇化することのできないほど濁りに濁つた社會を建設した。平和、正義の觀念は稀薄な、殆んど氣體のやうになつたに對して殘虐、暴勵の主張が鐵の堅さと冷たさとを持つて悪る固まりに固まつてしまつた、物質的には青銅時代から鐵の時代に推移して戰爭用の兇器は、その正確さを百倍に擴げて人類の利用を待つてゐる。

F

ガス體のやうな嫌なものが濃厚に世界を掩うて僕らの視野を暗ましてゐるやうな豫感がする、果して、その下には各國の縱列が戰爭の道に一直線に行進してゐるのであつた。

帝國主義戰爭はその針路をできるだけ長く隱蔽して、その通行については國民の耳目を欺く、どこに、いつ、どんな準備が整へられてゐるか、準備完成の時機も構成の形態も想像だけに止まる。そこへ突然に動員令を下すのであるから、それから遽てゝ國民は贊成を表する。帝國主義構成の一員である限り大砲の音で始めて戰爭を知つて、突嗟に擧國一致に固められる。僕たちはいつでも緊張して待機狀態に置かれる。

今日の日本で戰爭の根絶策をひねくることは實際政治家には一人だつてあるまいと思ふ、なぜならば政治家も財閥も宗教家も教育家も企業家もそれ自身が戰爭でできたものである。讀者諸君も著者自身も戰勝によつて人口增加が維持せられたための產物で、戰爭に負けてゐ

たら今ごろは被壓迫國家として發展を阻止せられ僕らの父祖は產兒制限を餘儀なくせしめられ、お互にこの世に存在してゐないかも知れない、存在しなかつた方が幸福であつたか不幸であつたかは閑な時の思索に任すとして戰勝を經てゐなかつたら國家としての日本は印度、フヰリツピン以上に氣の毒な境遇に置かれてゐることは爭へない、僕らの父祖が自分の働きから勝利を抽出したことは偉大であつた。どんな頭のひねくれた平和論者だつて負けたより勝つたが好からう、勝利の嘆美者は僕だけではあるまい。

G

戰爭、盜賊、貧乏の三大文明病を絕滅させる對策を持たないものは政治家としても學者としても資格のない人物である、その中どれでもいゝが一つだけでも何とか片をつけるものがあつたら人間以上の傑物である。歷史は同じことを繰返へしてゐるとはいふものゝ同じ位置に佇立しないで時とともに前進してゐることは否めない。しからば平和に向つて進んでゐるか戰爭に向つて進んでゐるかといへば、眼先きは戰爭の必要に突當つてゐるが、長い前途の

大勢からいへば平和に向つて動いてゐることが歷史の眞の姿である、なぜならば大多數の無勢力な人間は戰爭より平和を愛好してゐるが、昔ながらの頭をもつて戰爭を追慕してゐるのは少數の活動力のある人のみである。

もし戰爭ができないときまつたら人類は退化して文明は淨化しない、平和論者を見たまへ人間がにやにやけて勇氣がない、同時に感激がないから墮落する、不道德になる、戰爭も不道德であるが平和は軟性的に慢性的に不道德である、國家の健康狀態を維持するには戰爭は、少くとも戰鬪準備は有つてもいゝ。

H

エスキモー、アイヌ等の退化民族は戰爭から絕緣された、ノールウエー、デンマーク、オランダ等もやがて文明の第一線から退くであらう、しかし激烈な國際競爭で摩擦されてゐる日本國民に較べて個人的の幸福はどちらに在るかの研究は暫く措いて、戰爭のない國は文化の痕跡が極めて薄い。

機械工業の進んだ國ば貿易の外から資本、商船、戰爭といつた附屬物を抱えて進出せねばならぬから戰爭は國家活動の主役を演ずる、武力のない國は必然的にその席次を他の國に讓らねばならぬが、一たび讓つたら今さで自分が居た席を他人が占領して、更に再び讓れと迫る、二たび、三たび、つひに坐席を失つてしまふ。

貿易は有無相通ずる原則の上において必要なものと認められるが、列國が自給自立を考へるやうになつてから必要の原則が解消した。貿易に軍艦が尾行するやうでは貿易ではない、惡魔の交換である。必要が行き過ぎたから不必要になつた。産業國同志の貿易は未開時代に逆轉して日米間においては生糸對綿花といつたやうに物々交換と何の違ひを見出さない。

自給自足は明かに退歩である、退歩したあとに國粋主義が軍人を隨伴して現はれる。**關税で他國の製品を拒むことは勞働對勞働の抗爭である。**日本の勞働者が造つたものを、國内の勞働者を保護せんがために米國は排斥する。同じやうに日本が米國勞働者の製品を排斥することゝなつたら資本對資本、資本對勞働、勞働對勞働の爭ひを激化する。從つて勞働者が組國の勞働のために戰場に立たねばならぬ。

思想的には他國の倫理を排擊し、正義觀念でさへ國粋運動によつて原形を備へないほど訂正された。强制的に國論を統一する便宜はあるが精神的に文化は停頓する。

飛行機が米國の戰鬪力であるならば唯物論はソビエートの武器である、唯物論は研究室から出て立派な兵器に造りあげられた。日本には飛行機を恐れる一列と唯物論を恐れる他の一列とがあつて、一はモスコーへの道を塞ぎ他はニューヨークへの通路に柵をした、この二つの合體が國粋主義となり恐怖感念の上に舊い思想を新たに喚び起した。

米國は物質的科學的に戰勝の要因を握つたといふ自信をもつて日本に臨む、**これは納得できる自惚れである。**文明國の軍備が極度に精錬された今日では奇襲によつて勝を占めることは期待できないから戰鬪力の統計が結論を産む、この點において米國は大いに誇つてもいゝ紙上で誇つてもいゝ。支那でさへも戰爭に負けても外交で勝つ自信は持つてゐる。ソビエートにすれば思想で勝算を樹てゝゐる。

たとひ勝味はなくとも喧嘩もすれば戰爭もする、それは勢ひである。まして勝つ目當てのあるものが外交に讓歩しないことは當然で、戰勝國の帳簿には次のやうな科目が列べられる

優越感の充足といつた抽象的なものを除外して、土地割讓、通商路の進展、金錢賠償、掠奪物資、食料原料その他用兵上の重要地點の占據、その中のどれ一つとして貪婪民族の好餌でないものはない。しかしそれ等は昔から存在したものであるが現代的傾向として附け加へられる重要な利益が二つある、第一は無形的なものではあるが戰爭による思想の動向轉換である。

國民をして一致して國内相剋の憎惡心を外國に向つて集中せしめることによつて内亂を救ふことであつて、國内事情による外國攻擊である。自國民に恐怖を煽揚することによつて反國家思想を解消せしめ、尙ほ頑強に反抗するものは國家非常時といふ名の下に戒嚴令を布き平時ではでき難い大清潔法を施行する、これによつて國内の騷亂を未然に防いだ例はこれまでには少かつたが、これからは續いて現はれるであらう、であらうではない、きつと現はれる、斷定的だ。

近代抗爭觀念から開戰の原因に數へられる第二の動機は商業である。これは新らしい原因ではないといふ人もあらうが大戰以來各國が自給自足主義を固執するやうになつて始めて貿易が戰爭の新らしい原因を尖鋭化せしめた。

「日米戰爭が始まるさうだ」

「それは面白からう、觀覽に出かけやうぢやないか、どこでやるのだらう、外苑か、甲子園か」

「いや、太平洋の眞中だ」

これでは見物に出かけられない。

新聞がスポーツに刺戟的な兵語を使ふから日米戰爭を野球と取りちがへたのである。スポーツが本來の目的を誤つて健康を忘れて勝負に走り、商業がその本質を離れて貿易卽戰爭となつた。飛んでくるものは硬球ではなくして重爆である。野球のやうな不運面なものとはち

がつて、平和を享樂しないで血をかけ合ふ。

こんな危險な運命が、なぜ日米兩國民の上に割賦されたかといへば、機械が無理に生產を高め、高まつた生產品が賣れないで國內市場を埋めるからそれを疎通させるがために冒險的にまで外國に逐ひ立てられるのである。これではどんなに平和を愛好しやうとしても戰爭なくしては濟まないといふ感じが起るのは當然である。そんなことを考へて躊躇してゐる後から動力が殺戮へと押し出す、兩國とも戰爭の重大なることを知つてゐるから容易に起たない出脚が遲いから緊張狀態を續けたまゝ今日まで引つぱつてきたものゝ、形勢は曇つてゐる。

自給自足は排他主義であり愛國主義であり、それを擁護するものは高關稅である。他國の物資を買ふまいとする國民に、强制的に商品を突きつけるのであるから武力を伴はない貿易は成立しない。こゝに平和の商業と武力の戰爭とは首尾の罵劃が甚だ不鮮明になつた、商業が進んだ形態は戰爭であり、戰爭が終つたら貿易が始まる。

戰爭のない時には貿易によつて經濟的通路を開拓し弱資本を蹂躙しながら猛進を續ける、國外における搾取は、國內において勞働者から搾取したものをもつて廉賣戰の資料とする、

戰爭となれば無產者層が前線に立ち平和の時代にはブチブルをして生產機關の所有保存を圖らしめ勞働者をして平穩に機械の前に立たしめ、最大量の利潤を國內需用から集めてこれを金庫に納め、更にこれを再投資することによつて原料生產地域を獨占し、並せて消費市場をも獨占し、**消化し切れないものを提げて貿易戰に臨む。**

その取引が最高度に達する前の勾配において、すでにトラブルを起し、紛糾した解決を戰爭に求めるやうになる、强國は平和には貿易搾取、戰時には武力掠奪を敢行する、さうでなくては高度の生活標準を維持することができないのである。英米が維持するに骨折つてゐる「**高度の生活標準**」が**罪惡の基礎である**。それがために商人と軍人と、戰爭と貿易とはその根元において同一の動力で動かされてゐる。

武力のない貿易はダンピングの形式を取る外に活路はない、それさへ米、佛、英は廉賣防止法で峻拒する、ソビエートのやうな國家の勞働統制の下においてのみダンピングは可能であるが、その他の國においてそんな事を續けたら產業は衰へて結果は戰敗國と同一である。戰ひに敗れたら國際的經濟封鎖以上の慘狀に陷つて貿易が先づ挫ける、日本のやうな國狀で

あつたら食料さへ得られない飢餓に顚落してもそれを氣の毒と思ふほどの情誼の發動は高度生活標準維持者には望めない。

憐みを乞ふほどの無氣力でなかつたため日本は滿蒙に進出した、國民は狂喜してゐるが狂喜する前に前途の多艱を考へねばならぬ。朝鮮でさへ內地とは結合がまだルーズである今日に、たゞ手を扇のやうに擴げただけでは喜ぶことが早過ぎる、タイトに結束して一形體を仕上げるまで滿蒙は日本に取つて却つて荷厄介であるが、出られる時に出て置かなくては、出られない時には幾らあせつても出られない。

K

これまで日本が上海に出兵しなかつたことは、出兵を斷行したよりも驚くべきことであつた、出兵は寧ろ遲かつた、永く隱忍してゐたことは遠慮に過ぎてゐた。重工業に緣のあつた內閣が軟弱外交で、地主と密接な間柄の政府が積極的であるのは外國人からみたら經濟的見地から變調であるやうに思ふであらうが、日本の國是は總ての階級が一本調子に踊るのである、東洋保全のステーヂに立つについて、日本は支那の眼が必要なのだ。

どこまでも親善を押付けねばならぬ、武力も脅ふところではない。或は親善戰爭が起るかも知れないが、それも仕方がない。こんなに時間が押詰つてからは眼前の事例と緣の遠い學問的說明はすでに時機を失してゐる。

こんな不合理な國交は何とかしなければならぬと說を立てる人の意見を傾聽すれば結局はマルクスの受賣りだ。遠い外國人の昔の智惠を借らないでは結論のつけられない人、競爭に堪へられない人、國際協調ばかりを苦にしてゐる人の屁理窟は、實際家の前には空氣の塊に過ぎない、それを固形化したら一個の戰爭に落ち付く。

英雄主義は面白くないから大衆に政治を與へやうとして代議政體を樹てたが、理想とは似てもつかない畸形政治をつくりあげた。この鬱陶しい現狀を打破するため——世界的依存關係は認めるとしても——國家主義、民族精神に立脚した一單位を東洋に建設するには、日本といふ國家そのものを英雄人格に仕上げねばならぬ。

その二　日米戰爭の原因とその本質

A

どんなものでも勢力が強くなると勝手な個性を表現する。動力が始めて用ゐられた時には人間の手傳ひの外に何の野心をも抱かなかつたが、動力のために人間の勞働力が一とたまりもなく征服せられたのをみて、人間がくみし易いと慢り始め、米國人を手先きにつかつて動力世界帝國を建設する覇氣を持つに到つた、今日では米國はすでに完全に動力の傭兵と化した、日本もやがてあの手でやられるであらう。

動力は先づ機械を媒介として人間がどれだけの合理化に堪へ得るかをテストしたら、四分一世紀をたゝないうちに人間が悲鳴をあげて失業した、それをみた動力は人間を憐む代りに人間を侮つた、そして**人類をして相戰はしめやうとする慘酷な遊戯に取りかゝつた。**

戰爭は動力のいたづらである。人類が相鬪はねばならぬ原因は機械から流れて出る。戰爭は人間生活の一時的錯誤と稱せられたが動力が用ゐられての後は「戰爭は人間生活史の必らず進んで行かねばならぬ順路における阪である」と修正された、現在から未來へかけて人間は戰爭をやつてゐるか又は戰爭準備中に生活してゐることになる、將來において戰爭らしい戰爭をするものは動力をもつ文化人のみで機械を持たない未開人は國家的投機を行ふだけの社會力を持たない。

鎌は草を刈る農具として、弓は鳥獸を狩る獵器として發明されたが、古代人はそれを戰爭に轉用した。文化が進むに從つて武器は殺人專用となり軍人が破壞專門家となつた。農村部落は祖先、風俗、習慣を同うして群居したものであつたが、文化都市はさうではない、經濟上の共同利害から集團を成すに到つたものであるから**防禦と掠奪との目的で結束せられ易い**土地、珠玉、美人、貢物、分捕品は古代戰爭の目的であつたが、市場、原料、貿易路線、賠償金、そんなものゝ合計である戰勝利得といふ誘惑は強い力をもつて市民を戰爭に引きつける。貨幣といふ手輕な掠奪物の目的ができてから誘惑力は一そう強くなつた。**その外に後か**

ら戰爭に推進する大きな力が二つある、それは產院の產褥の中から進めといふ婦人の號令＝＝兒を產めば人口は增加する、人口增加は國家の膨脹を要求する＝＝と、もう一つは機械による滯貨山積の始末である。

戰時利得は興味と慾望とをもつて輓き、分娩と滯貨とは男子を推して戰場へ向はしめる。

B

機械は急速な行動に對する利便を人類に提供する、衝突しても九箇月間は戰爭手段に訴へることができない——瑞點規約第十二條——といつた悠長な戰爭が、現代の速戰卽決主義の下に行はれるものではない。文明人とはそんな遲鈍にして律氣なものではないから規約はさうなつてゐても規約の間道を通つて九ケ月は愚か九十日でも九日でも九時間でも、瞬間にも公式でない戰爭が始まるのである。非公式とは宣戰布告をしないだけのことである。機械は拙速主義だから、戰爭ではなかつたが戰爭に類した事變は、日蓮宗の坊さん一人を殺したのをきつかけに一夜にあの國際騷動を捲き起した。戰爭は屁の如し、國際人稠座の中でも九ケ

月もこらえてゐられない時がある、御免を蒙つて大砲の一發を擊ち出さねばならぬのつぴきならぬ場合もある。

不戰條約調印國といへども獲得すべき目的物が一つであり互讓のできない理由を持つ戰爭者が二つ以上である時には武力解決の外に何の解決法もないことは暗々裏に承認して除外例の請求を認めてゐる。國際會議に依賴して心から平和を求める國は機械を持たない、戰鬪力を持たない、文化を持たない、動脈硬化の老朽國家ばかりであるが新興の意氣に燃えてゐる國は、どこまでも强い拳骨を表面へ出さないでヴェルヴェットで柔かく包んでゐるのである。いま形勢は一變した、未來の一頁は過去の一冊より意義がある、僕らは不戰條約を後廻はしとして僕らの面前に置かれてある戰爭の卵を注視しよう。

戰爭を二つに分類する、階級上下戰と水平戰とである、支配者と被支配者との爭ひは××によらねば解決はできない上下戰である。過去の歷史においては殆んど重要視せられなかつた內亂であるが近代社會運動史には重點を置いて取扱はれてゐる、歐洲大戰の末期には到るところに戰はれた。

その二は帝國主義國是の進展による平面戰である、すべての文化國家はその方針を確保し延長せんがために武力を養ふ。外交によつて相手國を油斷させ武力によつて國策を押し付けるから外交手段は戰爭から戰爭までの息つぎに過ぎない。武力のないところに外交はない。國是も國策もない、形體はあつても或は國家が無いともいへないことはない。消極的な正義を振り廻はしてゐる國家は國際會議にも發言權はあつても聽くものはない、外交の後に大仕掛けな殺戮機關が物をいふ。

C

文明は戰爭を解消するといふ哲人の意見は道理らしく耳に響き、平和の外面をかぶつた穏やかにして人を魅する言葉であるが事實はその反對で野蠻國には戰爭がないといへる。**平和は理想の殿堂である、理想であるがゆゑに基礎の弱い存在である。**感情的平和論は夢幻のうちに聞き流しておくべきもので、それを信仰したら大變である。流行帽をかぶつてゐるがその泥靴はどうだ、彼は頭ばかり發達して脚もとの現實を忘れた。

平和が永く續くときは學理では分析のできない神秘な固形物に突當る、滋養に富んだ流動物ばかりを攝取してゐる金持ちに起る胃痙攣である、基督教的平和說を信じて防備を忽せにした國は酷い目に逢ふ。

歷史から觀た時は戰爭が社會主體の脊梁であつて文學、藝術、宗教等は枝葉の追加物たるに過ぎない。文化の中心活動の最高點は戰爭である。國家危急の場合以上に崇高な犧牲的精神を發揮する機會はないが、その秋に戰爭を回避したものは非國民であり、その反對に塹壕で働いたり軍資金に應募するものは人間として正しい道を履むものと認められる。この非常道德に對しては理論的爭鬪の餘地は存する、理論を幻影に求めたら論議は永引くからそんな閑人の相手になつてはゐられない。僕ら日本人は十年の平和に狎れて進取の氣象を失つた空隙は大きかつたのを滿蒙と上海事件で塡めて、これから新たに引緊まつた氣分で出發せねばならぬ。日本は國が小さいだけに、どつしりとした大陸性がなく東洋の盟主たる貫祿がついてゐないから支那を威壓するに足らない。僕らは弱い多くの力を要しない、強い一つの力を要する。**總ての力を日本人格に集中して、それを捨いて動かねばならぬ。**

D

銀幕に映する戰爭を見ても、悲慘な、眼をあてゝ見てゐられない殘忍な光景として顏を反けることの代りに、活潑な、素晴らしい劇として、眼を刮つて身を乘り出すではないか、それほど少年時代から慘虐に對する訓練が行はれて野獸性を注入されてゐる。戰爭において野獸性と勇氣とは切離せないものであるが、その二つは同一のものではない。

たゞ史觀的に、歷史は繰返すといふ陳言を盲信するのではないが、社會生活の順序を追つて數學的の徑路が僕らを戰爭に導くのだから避け得られないのである。レーニン一流の觀察によつても、貿易の經濟的進展による競爭的葛藤から外交上の抗爭となり、武裝となり、未開國民の搾取——**西洋から東洋へ**といふ動きが違算なく來る、これは正しい觀方である、ゆゑに東洋に國を建てゝゐる以上は西から求めてくる戰爭を回避できるものではない。

鑛山を發見する、鐵道を敷設する、河川航行權を得る、そんな度毎に貿易前線は國旗とゝもに進む、獨占を確保するために移動的には軍艦、固定的には要塞が後拒を爲して主權は推

進する。

E

日本は滿蒙を開發するために鐵道を要する。人口の捌け口として居住權、それに附隨する治安權及び敎育、宗敎の施設を要する、森林も鑛物も、牛も羊も棉花も必要である。英國のやうに廣汎な搾取地を世界に涉つて持つてゐるのではない、たゞ滿蒙のみに生活が依存するのである。しかし米國はそれを喜ばない、干涉によつて原狀に復せしめるか、反對に獲物の分前を强要するであらう。日本は門戶開放の名において××を××せざるを得ないのである米國はパナマに、ハイチに、キューバに何を要求したか、日本が滿蒙に求めた以上の或る物を獨占して、その分前は決して均霑せしめなかつた。

最近において日米戰爭が三度あつた、戰爭の定義は必らずしも流血を伴はないからその意味においても今も尙ほ引續き戰はれてゐる。第一回は九ケ國條約で延いて日英同盟の廢棄となり廿一ケ條の骨拔きとなり日本は明かに負けであつた。次が海軍々縮會議で比率で縛り

あげられた、その間に山東も日本から離れてしまつた、排日によつて日本商品は撃退されたその次が國際聯盟會議で局外者である米國が參加して日本を押へ、今に尙ほ押へつゝある。

戰爭の目的は自國の意旨を相手國に押付けるに在るから必らずしも發砲がその役割を演ずるものとは限らない、時としては發砲以上に威力を發揮する方法を用ゐることもある。文明國相互の對峙は一時の亢奮感情による格鬪よりも、利害の打算と彼此の戰鬪力の比較計算によつて勝敗の數を豫見し、戰はずして外交の机上において勝敗を決定することを有利とするなぜならばその方が犧牲者を出すことなくして弱者を退讓せしめて自國の目的を達することができるからである。日本は讓歩に次ぐに讓歩を重ねて今では最後の一線に止まつてゐる、これ以上に退却すれば後には千仞の斷崖がある、これが生存權である。これだけは利害損得の打算を超越して固守せねばならぬ、もはや戰鬪尺度の長短を論じてはゐられない線上に立つ。

日米戰はどちらの勝利になつても相手國に對して破壞行爲を極度に發揮するだけの力はない、從つて犧牲の大きい割合に得るところは少い。その上に双方とも資本主義國家であるから思想的に憎惡の根本原理が弱い。

敵國から明かに決戰を求められたら、一方はその條件を受入れて降伏するか、敢然として對抗するかのどちらかを擇ばねばならぬが、米國は暗默の間に警告といふ形式をもつて戰を挑んできた、**武力があるから警告には權威がある。**

野蠻人は個々における强き鬪士であるが文明人は集團によつて始めて强くなる。勇氣において及ばないところは智力で補ふがゆゑに智能の高度な國民ほど戰爭に强いといふ歸着になるが、實際においては戰爭には危險が伴ふ。文明人は危險を恐れる、危險を恐れる心は、やがて戰に敗れる原因で、たゞ膽力のみがそれを克服する。膽力は國家のために死を決した時より落付いたものはなく、名譽心から起つたものと利己心に基いたものは最も弱い。砲術に精しい人でも膽力がなくては命中しない、操縱術に巧みでないものでも勇氣によつて敵機を射落した例は歐洲戰爭にもあつた。金と機械とだけで雌雄が決せられるものなら日本は戰は

ずして米國の前に跪拜するを賢とする。

米國の强味は新鋭の飛行機と完備した軍艦とに在る。日本の軍部が新式技術部隊に支拂はれる豫算は米國の五分一、僅かに五千萬圓强に過ぎない、これを充實しないで日本の軍人に向つて勇氣と愛國精神によつて勝利を保證せよとは餘りに無謀である。技術部隊はいくらでも金を喰ふから平時においては浪費者であるが戰時における最尖端部隊である。日本の豫算が少いのと大官連の頭が古かつたゝめに時代おくれの兵器が整理されないで、まだ有効な武器として帳簿の上に殘つて倉庫を塞いでゐる。そんなものを氣前よく破棄して科學武器をもつてこれに代換せしめ、技術部隊をして歐米列强の新鋭に追隨させねばならぬが、それには又た資金の問題に突當つて惱む。これも日本をして退讓に次ぐに退讓を以てせしめたゆゑんである。

日米戰は、やつてみなければ勝敗の數が明かでないといふのが第三者の立場にある實際戰術家の意見である、**わからないといふ豫言は外れつこなしの豫言で、これほど正確なものはない。**勝敗の未定は見物人に取つて取組みに興味をつけるものであるが、當事者に取つては

前途の見込が確實でない仕事に生死を賭することは無茶ものゝ外にはできない冒險であるが戰爭は保險付きではない、危險付きであるから多少の投機も時によつて止むを得ない。

G

歷代の大統領のうちでもルーズベルト氏は賢明であつた、支那の門戸開放は戰爭を起してまでも遂行せねばならぬほど米國に取つて重大なものではないといつた、——さうであらう日本とちがつて米國の搾取地域は廣いから——。次の大統領タフト氏もその政策を繼承して東洋に關しては自重論者であつた。それがいつの間にやら曲型的傳統となつて戰爭付きの九ケ國條約を頑守せねばならぬことになつてしまつた。ホワイトハウスには他國の邪魔立てをして得意がつてゐる豫備策士が出入して絶えず大統領に戰爭の興味を溫めさせてゐる。

興味ある一點は日米戰爭におけるフキリツピンとハワイとで、これは米國に取つて强味ともなれば弱點ともなるやうに日本にしても同じことがいへる、しよつ鼻からこれを放棄するか、それ等を固執して日本空襲の足場 Scaffold とするか、この第一計畫が勝敗の第一頁であ

つて、ことによつたら戰爭の終局をも左右するかも知れない。

二十五年間も揺ぶられてきた日米間の懸案に對しても、ようやく近頃になつて日本の覺悟が固形化するに到つた。國際的顧慮から傾向を決定するに苦むこと四分一世紀を過ぎて、始めて日本は猛然として大陸行進の序曲を奏するに到つたのは、**この事業を纒めあげたならば支那大衆に取つても決して不幸なものではないといふ自信に到著したからである。**國際聯盟規約――第十二條――の曲解によつてもこの自信を覆へすことはできない。その他に日本の行動を妨害する者――第十五、十六條――が後に控へてゐても爆彈の前にかける一杯の水に過ぎない、そんなものを突きのけて日本は進む。

領土の擴張は人口過剰の國家に取つて必要な權利である、從つてこの種の國には帝國主義色彩の濃厚なることも免れ得ない。例を英國に取るのが適當であるが、手近な日本に取つていへば――これは領土の侵略ではなく住居區域の擴張であるが――本土に收容し切れない人口が鮮、滿、臺、樺に溢れた。しかしそれによつて、どれだけの人口を調節したかといふに臺灣に十萬、滿洲に二十萬、朝鮮に三十八萬、樺太に二萬を送つたに過ぎないから全部を併

せて一年の增加人口にも及ばない。それも軍人、軍屬、技術家、ゴロツキ、宗教家、御用商人が多くして、政府に寄生しない商工業者は少く勞働者は極めて少い。かやうに人口稠密の度を薄める効果は少くして、金を使つて外交上の冒險をやつた過去を顧ると、引合はない難事業である。

しかし日本がそれをやらなかつたら滿、鮮、台、樺はどうなつてゐるであらうか、露、英米、佛に瓜分され、日本は周圍から危險に暴されて今ごろ三等國の列に入つて獨立國の體面だけでも維持し得られてゐたら幸運の方である、引合ふと引合はぬとにかゝはらず現代では滿蒙を切離すことのできないのは、たゞ國防上からきた恐怖觀念だけではない。

H

經濟封鎖が有り得べからざることゝ思つてゐるのは餘りに不用心である。その前例は歐洲戰爭にあつた、經濟封鎖が規約の成文とならない以前に同盟國側がやられ、戰爭後にもロシアがやられた、**獨露に行つた手段が日本に遠慮せられるはずはない。**物資不足の日本を目が

けて白人結束の奥の手を出すことは有り得べきことゝ見るが正しいから滿蒙を聯ねて辛うじてそれに堪へ切らねばならぬ。もちろんそれだけでは不十分であるから國内においては産業組織の建替へから始めて、總てに渉つて經濟的調整の必要がある。政治、軍事、産業、社會生活を相關的、有機的、總括的に革めねばならぬことといふまでもない。

日本の大陸行進は絶對の必要であるが米國の必要はその程度が極めて輕い、帝國主義を象徴する星條旗が戰爭風に靡くに從つて軍事費は尨大する。造船業者、鐵工所、スチール業、船會社、軍需品製造工場、大商館は直接にその利益を受けるが、彼らのもうけた金の落付く先はモルガン、ロツクフエラー及びその一味の金庫である。戰爭ごとに金融業者の懐中は膨れるが、平時にあつて戰爭見越しの企業が利潤を擧げることができない。それどころか缺損を續けて維持することさへできない。鐵工所、造船所、船會社の株式は戰時に額面の四倍以上に騰つたものが今では額面割れ、半額、三分一にも當らぬほど凋落した。これを平和の犠牲といふ。これらの經營者は政治家をつゝいて侵略政策に突進しようとする。それが彼等の保身術である。侵略政策を行ふには先づ國民を恐怖させねばならぬ、**恐ろしきものを物色して日本を得た**、日本は米國の軍部御用商人によつて製造された悪魔である。實際必要としては米國は日本と戰ふわけはないのであるが、米國政治家にしても戰爭企業を見殺しにしては有事の時に差支へることを知つてゐるから無碍にその要求を拒むこともできず、つひに政府は大衆とともに危險な踊りを始めた。

米國の侵略手段は日本の想像したのと全く違つた方針の下に進んできた、金持ちの考へは違つたところがある。

一、享樂から來る生命の愛惜

二、富力をもつて武力に代へる侵略

三、經濟事情から來る侵略強要

この三つから進む、この文もこの三つから進んで行く。

同じ侵略でも無遠慮、無作法な商人國であるから英國のやうに禮儀的、紳士的假面をかぶらないで、金をもつて眞直に成金らしく出發する。

米國の機械工場は資本に溢れて、この上に資本を取入れる餘地がない、たとひ資本を喰は

せても利潤は極めて薄い。これまでの投下資本が四朱の利廻りに當つてゐたものが、これから後の投資は二朱にさへ廻らない上に恐慌の危險が多い、それほど資本に食傷してゐる。

機械はそんなことに歩調を合すことなしに、どし〳〵製品を送り出す、そこに蓄積資本と生產品との洪水が始まつて、あれだけの國內大市場を持ちながら消費を刺戟しようとすれば宣傳費と營業費とに大部分を取られてしまふ、この洪水の捌け口は一國一州の引受けられることでないから勢ひ全世界に求めなければならないほど、それほどの非常な勢ひをもつて氾濫しかけた。

國際的爭議を起してまで無理をして一局一部の植民地を武力で獲得しても、とても資本と生產との兩餘剩を捌くことはできない。戰爭は部分的で事が小さいに反して平和は世界的で廣汎である上に耳觸りがいゝ、米國に取つては戰爭が手段なら平和も亦手段であるから經濟的手段として平和と正義とを唱へ出した、平和は次のやうな搾取利潤を米國に送り込むので

ある。

米國の帝國主義の構成要素は不勞所得であり**不勞所得の元兇は金貸である。その金貸！**

土地の所有は英國、日本のやうな島國では名譽であり又信用の基礎であつた、農業經濟時代の舊式な資產勘定はその重點を土地に置いたが今日では日本でさへ財產は土地又は對個人債權から離れて貨幣支拂契約の債權に變じてしまつた。英國でも土地家屋が個人財產の最大部分を占めてゐたが收稅局の最近——一九三一年——の統計によれば、それが急變して有價證券、保險證書、機械が八割を占めるに到つたのは、恐らくは米國式に感染した現代財產觀念の轉換であらう。まして企業國であり株式會社國であり金貸國である米國人が小作權、居住權といつた立法の纏綿してゐる上に、讓渡、賣買に面倒性のある土地家屋に放資することを避けるのは當然すぎる當然である。

株式を買うにしても既成會社の株は割高であり、新設する餘地もない、土地放資は現在以上を吸收しないから利潤は殆んど無く、かつ共產主義者の前に隱蔽できない財產を晒す危險がある。この上の投資は無分別な浪費であつて、生產品を消化させることも投資の事業を見

つけることも國内では殆んど絶望である。

そこで次のやうな結論に迫ひ込まれる——

戰爭より海外貿易だ、海外貿易より海外投資だ——國内で投資するより倍の利廻りになる——。**しかも安全だ。なぜならばその回收は軍人、軍艦を通じて國家が暗に保證してくれる**——領土を擴張しないで投資によつて金融占領を考へたことは他國の眞似のできぬ賢明な政策である、もし動搖を感じることがあつたら愛國心を煽揚して自分の債權を擁護すればいゝ、武力侵略より高尚——或は下品であらうが米國人は高尚と考へてゐる——で外交上の無理がない。

軍艦と爆擊機とを必要とするものは米國人全體ではなくしてモルガン、シユワツプ又はそれを環る少數の一群であるが、全國の大衆は米國が武備を要するものと誤らされてゐるのである。これに對して金を借りたいものに歐洲の戰敗國があり、ラテン・アメリカがある、**もう一つ大切な得意先は支那であつて、支那保全の必要を痛感してゐるものは、この少數のグループである。**——こゝで支那の借金史に觸れる必要がある。

支那の債權者となつたのは英國が元祖であつた、英國は急激に增大して行く餘剩生產物の始末場所として支那に向つて進出したのは今から一世紀よりも前であつた。第一に消費財、ついで生產財、ついで金融貸付けといふ順序を經て今日に及んだが、始めのうちは直ちに消費消化される生產物ばかりであつたから跡の悶がなかつたが、それだけでは尙ほ不充分であつたため次に機械の輸出を始め出して、こゝに支那の工業化を招來し、**自ら工業製品の輸出に對する强敵を造つた。**

機械のうちでも電燈、鐵道等に關するものは英國に取つて何の反映もなく賣りつぱなしのものであるが、紡績、織布機械はそのまゝ死藏されるものではなく、据付けられたらその型日からランカシヤにおけると同樣にすぐ稼ぎ出して支那のために英國の製品を驅逐する働きをする。これは日本において鎭紡、東洋紡を造りあげたと同じ過程において、支那においても低廉な賃銀と長時間の勞働とをもつて操縱せられるから、ものしたものが却つてものされ

るやうな近代的工業裝置を築いてやつたもので、英國の紡織が日本において、印度において支那において競爭に堪へられなくなつたのは誰を恨むこともできない自業自得であつた。

生產財が一巡取引きされて次は金融侵略に入つた、金融といつても正貨を貸付けるより支那から受取勘定になる戰爭賠償金と、貿易逆調による決濟支拂（物品購入費）とが重なるものであつた。支那の債務合計が六十億兩に達し、その三分一弱は利益を產む生產財であるが三分二强は經濟的に支那を潤すことなく霧のやうに消えてしまつたのであるから二億八千萬の利子は年々支那を痞せしめる、それさへも支拂ひ切れなくなつたから關稅を外國の支配に委さねばならぬやうになつた、關稅が自國の支配を離れてから支那の貧乏は加速度に進んで行つた。

この時分から米國も登場して搾取が急に重加した、アヘン戰爭から今日まで列强は種々の手段をもつて支那から精力と富とを拔き取り、輸入超過の決濟と借款の利子とを、債務を增して支拂ふから列國の金融侵略は支那を立枯れにまで機能した。

支那がこゝに到るは支那自身の不統一と誤つた排外心が招いて禍であつて列國はその虛に乘じたに過ぎないが、經濟的に搾取するには外交的に壓迫せねばならぬ、外交の後には武力がある、米國は武力と金力とを提げて支那に臨む。

受身であつた支那は俄然として能動的になつた、禍亂の溫床であつた支那が覺醒したのは日本人として賴もしく思つたが、**覺醒したのではなく寢とぼけたのであつた**、彼は敵と味方とを錯覺して金の米國を友として貧乏の日本を敵とした、日本を倒すことは東洋全體を亡ぼすことに思ひ及ばなかつた、惜しいことをしたものだ、日支兩國のためにこれを吊ふ。

その三　生活の破壊から戰爭へ

A

支配階級が無產者を働かしてその餘剩を搾取してゐた期間は無產者に不服はあつたにしても、それは堪へ得べき不服であつた。しかるに超人間的な動力が現はれて勞働力を驅除するに到つて、働かうにも働けない境遇に無產者を監禁してしまつたから、こゝに戰栗すべき事態が擡頭した。

無產者が企業家を苦しめた武器は怠業であり罷業であつたが、それは勞働力の必要を感じるものに取つては脅威となつた時代であつた、動力によつて勞働力の價値を失つた時代にはストライキをもつて企業家に迫つても物資過剩で操短を考へてゐる今日では餘り强い抵抗でもなくなつた。日本における勞資爭議によつて失はれた勞働延べ日數は一年平均二百萬日に

上つた、この浪費された日數は資本家を苦めた時もあらう反對に喜ばせた時もあらうが、勞働者は除外例なく苦んだ數字である。

資本家が生產過剩に悩まされてゐる時に、欺かれて罷業を始めロックアウトの陷穽に投ぜられたことさへある、勞働者の勞働能力を極度に歡迎することは戰時を除いては決して有り得ない、それほど動力のために勞働力の價値は弱められた。

動力が始めて現はれた時は資本主義經濟組織の中に都合よく消化されるものとばかり信じられて、何の準備なく機械を通じて歡迎された、なぜならば動力は形のないものであるから注意を惹くことが薄かつたからである、もしそれを形に現はせるものなら地球に載せ切れないほど大きな、そして力强い怪物である。

人間だけの働きで生產し、人間の力で消費するものなら自然に均衡が取れて行くのであるが、人間以上の働きをする動力が生產し、人間以上の働きのない人間が消費するのであるから賣れない商品が堆積して人間の生活を失望の飢餓に窮迫するに何の不思議はない。

こんな不條理な道筋を更正することなしに、その日暮しに世を渡つて焦燥と貪慾と飢餓と

不安との組合せであるエスカレーターに運ばれて、それが前途に幸福な世界を展望しつゝ進むのであらば多少の忍苦は覺悟せねばならないが、それが一層悲慘な生活苦に導くべき仕掛けに載つてゐるのであるから人類は前途の豫測に脅え始めた。

B

貨幣に比して生産品が超過する時は當然生産品の下落を招き、倉庫に在る資本家の商品價値低下を伴ふがゆゑに企業家は金融資本家とゝもに共同防禦線に立つて價格維持の方法を考へる。

國内大業に購買力なしとせば買ふ氣の起つてゐない他國民に自國の餘剰を賣るより外に方法もないが、どの國も生産不足で購買力に餘裕のある樂土はない。國内國外ともに賣れないとすれば、餘剰生産品を破壞して稀少性價値を保有する外はない、自分のものを保存して他人のもの他國人のものを破壞し、その空隙に自分のものを送り込むことは有利である。

營利から出た滯貨は、その解決策にも道德的觀念はない、利益のためには殺戮を辭しない

戰爭は破壞の最大なものであるから滯貨はそれによつて一掃される、動力による大量生産の解決は戰爭がつけてくれる以外に何物がある、歐洲大戰の大破壞に次いで次の破壞が考へられる。

消費力は固く凍結してしまつたから、これを融解しての後にあらざれば生産物を捌くことができない、消費力はそのまゝ生産力といへるが生産力卽購買力ではない。操短、休業等の人爲的加工によつて生産力を抑へ、アンチ・デフレーションによつて消費力を伸ばさうと努めてゐるが、骨折れば骨折るほど縮んでしまふ。

生産物は富ではなく消費される時に始めて價値を生ずることは誰だつて知つてゐる、消費力のないところに富はないから高價な原料を輸入して造つたものでも賣れないものは富でない、埃である、富であるべきものを埃として消散せしめる原因は動力である、金本位でも銀本位でも金銀兩建でも、デフ、インの二フレーションでも財政家は救濟策に苦心を費すのは勝手だが、そんな政策を束にしてかゝつても動力の一蹴だ。

C

牧場の羊が機械で剪毛されトラックで洗滌工場へ送られ、精毛工場でパツキングされ、織機にかけられ、加工され、電氣庖丁で截斷され、電氣ミシンで縫はれ、穴かゞり、まつひまで機械で始末され、機械的に標準化されたものが、學校教育標準化されたサラリーマンに着られるが、流行は早く去る、古い洋服は解き放され古毛が又た新樣の流行ものゝ中に織り込まれて現はれる。この工程の中でこれまで一萬人かゝつたものが機械のために三分二は失業群へ投ぜられた。

勞働者は動力に追ひ廻はされてゐるがために動力が勞働者を撲殺する殘忍性をもつてゐることを知つてゐる。又た自分の腕が齒車の廻轉力に及ばないことも知つてゐる。動力の前で失望してゐるより何とかして早く勞働に見切りをつけて生活を轉換しようと考へても惰力習慣、固定性をもつた筋肉勞働から脱却することができないで依然として機械の前に立つてゐるが、せめて自分の子だけは動力から離れた安住の地を與へたいと考へる、勞働者は自分

の子をして勞働から離れて直接に資本家に隷屬すべき職業を擇んで店員、事務員を志願せしめることによつて機械よりも金力に附隨するの賢さを悟つた、それほど動力は勞働者を壓迫した。

動力は勞働に革命を持ち來たしたにかゝはらず資本主義は頑として一貫した方針を曲げなかつた、直接搾取が動力による搾取と勞働樣式を變へただけであつた。未開時代には熟練工と不熟練工との間における賃銀に非常の差があつたが機械が發達して人間のすべき高等な仕事までやつてのけるから熟練工はその經驗による誇りを奪はれるとゝもに高率の賃銀をも奪はれつゝある。筋肉の力を要する仕事も機械が代行するから力の弱い婦人少年群が力の強い又は老練した高級賃銀者を驅逐して賃銀の前途は騰貴の見込が少い。勞働者は失望する。資本家はそれを利用して搾取に力づける。

電氣は空氣と同じやうに國境を超越して地球を被覆してゐるから有價物とはいへないが、それが機械に觸れて人間に作用する時は恐るべき威力を發揮する、世界で恐るべきものは米國の動力であつて金力でも兵力でもありはしない、大量生産に動力が働かないものはない、

平時の生産競爭には重爆の効果を現はし、それに狙はれたものは人でも馬でも粉碎されてしまふ。

動きの鈍い靈が日本の産業を助けるものなら電氣は米國の特産動力である。あのぴか〳〵ツとくる嫌な光線が、どんなに將來に怪光を放つかは米國の前途とゝもに疑問として殘される。

D

電氣が米國から出て世界を吹き廻はつたそのムンスーンのやうな跡には、たゞ荒廢あるのみである。

米國は動力で日本生産の咽くびを緊めるから僕らの生活は息苦しいのである、日本産業の自主は米國の大量生産の把握から逃脫することから始めねばならぬ。

米國は東洋の友好國だといふ、そんな友人は東洋に取つて招待しないお客さまだが、彼女はいきなり東洋人を包擁する、恐ろしい力だ、人力ではない動力だ。平時の貿易戰にも好ま

しからぬ友人は横行して大陸への日本の行手を妨げる、平時でもあの通りであるから國交が破れた時のやり方は想像に難くはない、國際會議にもこの友人が日本の肩をたゝく、己が友「軍艦建造をやめてお互に仲よしにならうではないか、と、差伸べる手には柔かい天鵞絨の手袋をはめてはゐるが、握手すれば何だか柔かい中に金屬物の硬い或るものを感じる、小形のピストルではないか。

E

日本人の一日も無くては困るものは「米」であるが、それは Kome であつて Bey ではない、むろん America ではない。

米國の文明はスピードの上に建つ、生産組織にスピードを與へるものは動力で、これに對抗する人力——手工業——は一閃の下に倒される。

動力はどんな土地を選んで腰を据ゑるかといへば、哲學のない、藝術のない、傳統のない個性のない、そして雷同性の強いところである、彼れは世界を見廻はしたが英國はいけない

なぜならば傳統と個性とが餘り根強い。フランスでもない、なぜならば藝術と哲學とが邪魔になる。あれでなし、これでなしの結果が米國を見つけ出した、米國は動力王國建築の總ての條件を備へた絶好地盤であつた。

動力で勝つたら賞與は大きい、動力で負けた破産は苛酷を極めた條件を課せられる、通商路の獨占、市場征服、價格競爭、開拓斥候、奇襲、主力攻擊等々、動力は好戰的である。デモクラシーは戰爭を中核とするものに變つた。

動力は米國人をして自我心を去らしめ思慮を去らしめ、人間を白地にして機械の一部となるべき役割をあてがつた。冥想の感覺を克服して速度の眩惑の裏に沒入させたから中味はなくして見かけ倒しの艶つけではあるが米國は無茶に繁榮した。

F

いま文明國には生活上に一の變態が起りつゝある、人間の趣味を低い一定の型に嵌め込むことである、かうして置けば平時において統馭し易く有事の時には少しの煽動で支配者の思

ふまゝに共同動作をする大きな力となるからである。

生産した物資の價格が生産費を償ふに足らないから土地は遊び、勞働力は眠り、資本も借金も遣り繰る以外に活躍しないで休む、——それは人が作つた問題であるから人が休めばそれで仕舞ひであるが、動力だけはそんなに手輕に片付けられない。

動力も人間が引つぱつてきたものであるが今では超人間の存在であつて、自分の産んだ子が親不孝を働いてゐるやうに自分の子でも自分で處置をつけられないで不良兒として社會に放浪してゐる。

動力の本質は不眠不休的に大量生産をする一面的動作であるから、相關的の相棒である消費を顧慮することなく**自我的に走つてしまつて生活に調子が狂つてきたのである。**

これなくては生産品の原價が安くならない上に、新鋭の競爭機械が現はる前に、現在の機械を使つて自分の能力の無限界的發揮に努力する、どんな機械でもそれに取つて代る新案機械が現はるまでの生命であつて、その生命は極めて短いから早く働かせて早く原價を償却させないでは企業家は古い機械を抱いて倒れるであらう。機械を新たに据付け終つたら好況と

不況とにかゝはらず据付けたその日が大量生産の開業日であらねばならぬ、**ゆゑに機械は強氣で押切る**、人間生活の調子は機械の知つたことではない、動力は片つぱしから經濟學者の舊學説を粉碎し歴史的生産組織に對する信仰を踏みにじつた。

かやうにして出來た物資は原價が安いため未開國の關税壁を容易に乗り越えて東洋に侵入し、日本の財界を荒廢せしめた餘波が波紋を擴げて支那に及ぶ。

G

機械が自働的になるに從つて勞働者を寄せ付けないやうになり、複雜精巧になるにつれて價が高くなるから中小工業者を追つ拂ふ。機械は富豪の獨占に歸し稀少性價格は擴大する。失業者が苦むと同じやうに辛うじて就職した者でも一人當りの生産增加を強要せられて監督に追はれる鞭鐘の下に從前より一さう能率的に一さう息苦しく働かねばならぬ、かやうにして出來た製品は國内に充ちて他の勞働者を失業させ、さらに屍形を成して海外に溢れ他國の同階級――勞働者――をさへ苦しめねばならぬ。米國の失業者五百萬人、さらに米國の大量

生産に惱まされて失業した外國人――日本にも多數ある――はその五倍にも及ぶであらう。

米國の動力はその敵を知つてゐる、それは太平洋を隔てた薄汚ない――彼は左樣に意識してゐる――日本である。日本人の勤勉、低賃銀、機械操縦術の上手なこと――英國の紡績もこれでやられた――電氣力を起すに適當な水脈を有することは、米國に取つて油斷のできないものとして米國から發するライムライト（照明灰光）の中に注視されてゐるが、今はまだ米國の模倣時代に過ぎない。

H

動力には藝術味がないからその大量生産物は卑しい規格に統一されてゐる。文學でも、映畫でも、人物でも、道德でも、音樂でも安すもので大衆的である、安すものゝ大量生産品目を列べた中に文學、道德、音樂などが動力から出來たといふことは著者の筆の横に辷つたのであらうと思はれるがさうではない。電導機印刷を除いてアメリカ文學はない、道德も人間によつて安價に造られ人間は機械によつて生活し機械の運轉は動力に須つといつたやうに、

音樂でも複雜な機械で合奏し、今に樂器を列べておいて、それに電流を通じたらヂャズを奏するやうになり人間はステーヂに列べて電流によつてダンスを始めることになる。國を通じて電流は交錯し個性は間斷なく磨滅する。

動力は強い、動力にはイムペリアル・ドメーンがないと同時に全世界がその力の及ぶ領土であるから動力を獨占したら世界は一握の下に在る。兵力、金力の強さに優る。

市場は消費を、工場は生産を代表するが、市場には市價があつて工場には原價がある、どんな無茶な暴利屋でも市價を考へないでは賣價を決定することができない、消費は賣價を決定する。

工場には原價はあつても相場はないのが基本法則であるに反して米國の大量生産制度は市價に頓着なしに廣告宣傳によつて勝手に市價をつくり、**主客を顚倒せしめて消費を生産に從屬せしめやうとする。**動力が押す横車である。

貿易戰においても米國のいはゆる文化生産品を買ふことは、買ふべき必要によつて買ふことは少くして、新意匠、新流行といふ示唆によつて買ふ必要のない生産品を攫ませられることが多い。動力の臣下である機械は無限に生産するが、買つてくれるものが無かつたら何の役に立たない、**そこで動力は悟臣である米國人に耳うちする……。**

お前は何を愚圖々々してゐるのだ、お前の生産品を買つてくれる顧客は東洋に滿ちてゐるではないか、支那には電氣梨、無線電話機、飛行機、ラヂオ、自動車を持込め。日本にはフキルム、樂器、金錢登錄器、ミシンを持込め、持込むと同時に宣傳を忘れるな。五十圓の樂器には百圓の宣傳費をかけて二百圓に賣れ、目新らしい自動車なら原價二倍の宣傳費を惜むな、不必要なものでも無くてはならぬ必要なものとの幻覺を起させるほど巧妙な廣告文を考へろ。惡魔の造つた粗惡品でも、まるで全智全能の神さまが造つたやうに振れ廻つて奉仕品のやうに調子を張りあげるのだ、さうすれば貧乏な國民でも——貧乏人は貧乏なほど新らしいものをほしがるものだから——機械の祭壇の前に黃金の牲を捧げて跪拜するのだ、あとには俺が控へて、いくらでも大量生産するのだ……と、かう、動力に激勵されては脚氣の馬でも鞭影に走る。

一足の靴をはき破らないうちに、もう型の變つた流行型を突き付ける、一足でも重きに困つてゐる人に同時に二足も三足もの靴を穿かせやうとする、さうでなくては消費し切れないからである。買手のない繁榮である。

人間には鋭智と愚鈍との兩面を同時に備へてゐるから**鋭智の方に觸れないで愚鈍の虚を衝くのが米國の衆愚征服の宣傳術である**、愚鈍の畑に錯覺の種を蒔かれたらその收穫は貧乏である。英國製品のやうな實質のあるものを買はないで香具師ものが世界に蔓こるのはインチキ宣傳の力である。

日本には水力が豐富だが、全水力を動員してまだ不足するだけの需要が起らないやうでは何の商工立國だ、僅かの水力で電氣が過剰を訴へるやうな國家が何の五年計畫だ。水力電氣を起すに便利のいゝところは意地悪く風景のいゝところであるから風致を害するとか、灌漑に不便だとか、つまらぬことに藉口して堰堤を妨害する、國家財政の危機が岩に碎けて水沫

となつた風景を考へてみるがいゝ。米國ならナイヤガラの形勝でも勁力には代へられないといふではないか。

原料が生産品の基礎となることは萬古變りはないが資本家は機械の据付けに向つて莫大な資本を投ずるを惜まず、**中間製造機能である勞働者を飛び越えて自働的大量生産を企てる、**從つて現代企業は勞働者を問題にしないで新らしい機械を繞つて株式を募る。

世界の利益は米國に集中し、宣傳のトロールに引つかゝる貧い國民は、やがて國防の稅源もないところまで水氣を搾られて、そこに米國の覇權が確立する。早く、一刻も早く、吾々はアジア・モンロー主義を成熟させねばならぬ。

その四　退屈から戰爭へ

A

僕らは一日を何して暮す？　朝起きたら新らしい刺戟を新聞の中に求める、新聞記事はどこまでが本當で、どこまでが宣傳で、どこまでが嘘で、どこまでが與太であるか、そんな警戒をしながら讀んで行く。

昨日と連絡がなく、明日にも持越されない何でもない出來事が、ちよつと僕らの神經を刺して、間もなく消えてしまふ。

ラヂオが新聞記事より一足早く聽神經を一と搖り搖つて空虛な空の、その高いところへ大きな稀薄な波紋を擴げて、太陽と星とにぶつつかる前に、どこともなく消えてしまふ。

耳を働かして又た眼に戻る、東京大阪の新聞に外字新聞を加へて讀むのだが、この頃は頁數が增したから全部を讀んだら日が暮れる、それでは新聞を讀むだけの用事でこの世に生れ

てきたものだ。どん〳〵飛ばして、時としては見出しだけを拾つて進んで行く。

一般が興味を惹かない廣告文でも讀んだら面白い、商戰の血が滲んでゐるのもある。一行十五字詰が一圓五十錢なら一字十錢である、テンセンス文字にも種々相が踊る、必要でないものに金を使はせやうとする宣傳の努力は眞劍である。

B

祭日とか正月とか、新聞のない日はやれ〳〵といふ感じがする、同時に何となく物足らぬ感じもする。朝食だ、入浴だ、通勤電車だ、事務所には堆積した刺戟文書が机上に横はつてゐる、それを整理し了へさるまに晝食だ。又たラヂオが刺戟する、その休みを利用して散髮をする坐眠る——ゆふべキネマで疲れたからである——。すむと又た事務の刺戟だ、電話だ電信だ、訪客だ、用事と用事との空間を埋めるものに交際があり人事がある、一ぱいやな金の話も出る、死んで行く人を吊ひ生きてくる人を歡迎する、はら〳〵したり冷やりとすることは電車の交叉點でなくとも事務室の安樂椅子の上にもある。

人間が生きることだけに全力を盡してゐるから享樂の餘地がない、生活を正しく消費しないから人生に何の意義を成さない、さういへば教育によつて智識を得たならば意義が現はれるであらうといふのは更に馬鹿げた考へである。宗教を信仰したらどうだ、道德家になつたらどうだ、だん〳〵誤謬が擴大する　困つたね。どう云つたらいゝのだらう、どういつてもわからないかも知れない。では享樂とは何か、キネマかダンスか、そんなものは享樂の外皮に過ぎない、中味がちがふ。

道德といつた枠の中に身を入れたら窮屈でたまらない、自己の愉悅を棄てゝ一生を奉仕で得心するなら「個性」はどうしてくれるのだ、青白い顏を頰紅に染めて、そこに健康美が存在するか。享樂は社會から遣られないて自身から現はれる。

コツプがある、それに神が水を一ぱい注いでくれた、毎日毎時少しづゝ蒸發する、定命五十年でコツプの底まで干上つてしまふといふ恐るべき退屈なものであるが、人はそれを退屈しない。どうとかしてこの水を長く、そして有意義に使用したいとは恐るべき謀叛である。生命は神から預つたもので神が取り返へしにくるまでは保管の義務があつてコツプを割つたり——自殺——コツプを引つくりかへす權利は與へられてゐない、債務者が執達吏に封印された財物を保管すると同じく何といふ重大な義務を負はされたものであらう。

C

夜は享樂の刺戟をキネマにオペラに求める、雜音だ、騷音だ、文明人の眼は近く耳は遠い四六時中五感は緊張し切つてゐる。夜でも眼が覺めたら何か考へる、家庭は悲劇と同居して街頭には嫌やな社會相が混雜してゐる、貧富の別なく落付きがない。僕の家は今國際ホテルの建築と理科大學の地ならしと筑前橋の架設と高速地下鐵工事とで、大地とともに動きつゝある。突然頭を毆られたかと驚起すれば、どこかの工事場で杭を打込んでゐる電氣ハンマーの音であつた。

こんな生活には默想の時を持てない、併しその反對に退屈で暮らしたら世の中は陰鬱であらう。東洋の哲人は小人閑居して不善を爲すとか、ぶら〳〵してゐるより賭博でもやつてゐる方がましだといつた、西洋の哲人は一歩を進めて、退屈したら隣人と喧嘩せよといつた。

文化人は忙し過ぎるより暇すぎることを恐れる、單調な靜かな生活を樂むことは哲人のすることで、國家でも平和が續いて退屈すれば隣國に戰を挑むやうになる、武備が完成して金力が充實したら尙更らであらう。貧乏暇なしとは金持ちを助ける標語である、なぜならば貧乏で暇があつたら富豪打倒が眞先に頭に浮ぶからである、金持ちは暇があつてもいゝことを行はない、貧乏人を更に貧乏にさせることをたくらむ。

D

歌舞伎よりキネマの方が變化が早く從つて刺戟も多く觀覽者に退屈の機會を與へないから下手でもごまかせる、能狂言といつた日本の古典ものは、ゆつくり觀賞されるからよほど精練せられたものでなくてはアラが見える。かういふ行動の遲緩なものを米國型の青年に見せたら退屈で氣が狂うかも知れない。現代人は焦燥な生活を送つてゐるから個性の陶冶がない政治家でも領袖となれば特に忙しく、在野時代に百二十五歳まで生きられるといつた故大隈侯が總理大臣になつて、これでは長壽ができないといつたことがある、收賄して未決にたゝ

き込まれて退屈の餘り初めて人生の眞意義を悟つたといふ前大臣もあつた。輿論に反抗して毅然として自信を曲げない大政治家が氣短かな青年に暗殺された例が日本に多いが、これは氣の短いといふよりも無茶である、常に靜かな修養が不足してゐるから簡單な直接行動をやるのであらう。

眞理は刺戟性が弱い、だから眞理を含んだ文章は讀まれない、讀まれない本は賣れない、聽かれない說はしやべり損である。ゆゑに眞理は街頭から姿を消して、たゞ眞理を打消す騷音のみが世を支配してゐる、彼女は「考へるな、落ちつくな、反省すな、たゞ浮足で走つて走れ」といふ。

人間でないものは總て幸福である、ペンギンは氷の上で卵を溫める、その卵をそつと硝子玉に取りかへて置いたら、いつまでも〳〵それを溫めてゐた。南極で越年して退屈でたまらない人間は、そんないたづらをして退屈を凌ぐが、鳥は退屈を知らぬ。なぜならば鳥には映畫を觀る眼がないからである。

退屈すればペンキを氣の毒な目に逢はせても何とも思はない人間の惡智惠を憐れむより

も、白いチョッキを着たモダン姿の彼女の樂天的な、生な點に戀を感じる。

退屈すれば隣人と喧嘩でもして無聊を慰めやうと思ふ心が一國全體を支配した時は戰爭である。封建時代には戰爭專門家が大小の武器を帶に挿んで農工商民の上に立つてゐた。退屈したら辻斬りもやつた。現在でも戰爭は科學であるといふに職業でもある。軍人、兵器製造業者、工廠の工人、學校の軍事教官、御用商人、それに被服廠の女工まで加へると地球上で戰爭業者は一億に幾い、そんなものが退屈凌ぎに演習をやる、演習で力が入らないといふ不滿足が、十年目ぐらゐに環つてくる實戰で清算される。

E

隣人はいゝのを持ちたいものだが、僕らの家ではどうだ。

北の隣家は僕の子弟を唆かして家庭をかき亂すのだ、彼らにいはせると立派な理由はあるであらうが、こちらの家憲家風に背いた反逆を教へて、子をして親に、妻をして良人に對抗せしめるのである。

東向ひの家は大成金で、ほんとうの金持ちではなくても遣繰上手で金使ひが荒い。大きな庭園に四季の花が咲き亂れてゐるが猛犬を嗾かして近よるものに咬みつかせる、教養のないものに不相應な金を持たせると不道德的に近所の風規を紊すから困りものであるが喧嘩に強いから相手になれない。

西隣りの家ときては集團を成して雜居してゐるが、どれが主人でどれが同居者だが區別が付かない。どれも皆主人だといつて表札を五六枚も貼つてゐる。仲間喧嘩が絶えないから騷々しいこと甚だしい。垣の向うから煙草の吸殼などを投げるのはいゝやうなものゝ、火の用心が惡い。時としては猫の死骸でも投げ込む、これは衛生によろしくない。

けさも石を投げて硝子戸を破壞した、あぶないことだ。垣の蔭から僕らの惡る口をいふ、近所で借りたものを拂はないくせに妻は賺繰りを遣い銀行に預けてゐるさうだ、町内の教育費も衛生費も拂はないでピストルを買つた。障子は折れ疊は破れてゐる上に内輪喧嘩で火鉢を引つくりかへした、火は燃え上る、それを消しに出かけたら家宅侵入罪だと逆捻ぢをやられた。

こんな周圍の中で暮らしてゐる僕らは戸締りを嚴重にして棍棒を枕許に置いて眠る、これを稱して國防といふ。彼らは戸締りをしてはいけない棍棒を棄てゝしまへといふ、これを名づけて平和といふ。

彼らは惡罵する、ファッショだといふ、侵略主義といふ、支那を分割する用意だといふ、彼自ら分割の危險をつくつて自ら怒つてゐるのだ。彼らは僕らの周圍を周つて騷いでゐるが僕らは暇のない貧乏で隣家のやうな大地主ではない、自作農であるから營々として働いても尙ほ日暮の早いのを悔む、春日遲々たる夫婦喧嘩にかまつてはゐられない、米國のやうに金ができて閑があつたら九國條約などを振り廻はす餘裕もあるのだが。

F

國際軍事年鑑はたゞ數字を列べただけのものであるが片手で持ち上げられないほどの重味を持つてゐる、それでも軍事費全體を總括したものとはいへない、なぜならば軍部だけでは戰爭ができないからである。文部省も內務省も商工省も農林省も、すべての省の豫算中に割

り込まれてゐるところの思想善導費、青年訓練費、馬匹改良費、理化學研究費、時としては植民省の豫算で在外駐屯軍費を賄つてゐる國もあり、その他電信電話、鐵道船舶、埋藏物（石炭、石油、鑛等）民間の自動車飛行機、綿花、食料、發動機、製造工場、船會社、鐵道の補助といつたやうに血の全身に行渡つてゐるやうになつて、豫算では巧みにカムフラージされてゐるが、軍事といへば殆んど國家の總てを囊括してゐるから、どんな精密な調査をしても砂糖と砂との混交の中からその二つを仕分けることのできないやうに、秘密の伏せてある豫算を裏がへして讀破することは謎を解くより難である。

支那のやうに正規兵と雜色軍と匪徒と苦力との區別がない上に、山には山賊あり海には海賊、野には馬賊があり、思想的には共匪、排外運動には學匪（學生運動）がある捉へどころのない妖怪國家は除外しても、文明國でさへ判然たる軍事費といふ科目がないから列國の公稱軍事費は年額五十億ドルであるが私稱（實際の）はその十倍に上るであらう。費用の莫大なことに驚くだけでは濟まされない。學者、科學者、技術家の腦髓は人類の幸福建設に向けられないで、社會の破壞に向つて浪費されてゐることは、損失が無形的ではあるが更に惜む

べきことである。

天文學者が一個の星を見つけやうとして精力を虛空の一點に集中して、それを發見し得ずして一生を終るものがあるやうに、地圖と作戰計畫とに全智能を傾注して、それを一度も用ゐることなしに逝いた戰術家も亦た多い。そんな周密な、そして進軍ラッパの響がない前に勝敗を机上に決定できるやうな合理的の研究を實際に使はないで、死とともに消してしまふことは勿體ないことである。しかしそれが使はれないで濟んだことは國民としては幸福であつたであらうが、その人は退屈なことであつたであらう。

退屈して出る欠伸は士氣の頽敗である、軍隊に欠伸をさせるやうな軍政家は土乘なものではない、常に眼さきを轉換して士氣を新にし、演習を寢氣ざましに行ひ、假裝敵國の優勢を圖示して恐怖心を起させ、そんないろ〳〵の手段が盡きた時は實戰で活を入れる。

欠伸は傳染する、一人が欠伸をすれば、それをみた人が又た欠伸をする。資本主義に疲れたら共產主義の欠伸が出る。**長期に渉る平和は精神的にも肉體的にも空隙を生じて欠伸する欠伸止めのまじなひは戰爭である**、戰爭はいゝことではないが、國家が慢性的に退化するよ

りは勝つてゐる。

G

戰勝の後には資本主義が確乎たる支配權を植付けるから戰勝卽ち資本主義の勝利であるが戰敗はその直後に××的を××招來するから無產者の勝利に歸することが多い。歐洲大戰のやうに戰爭が長引いて決しなかつた時には軍人が退屈する、そこに危機が伏する。

愛國的亢奮は資本主義を支持するが、愛國的亢奮が冷却しかけた時に無產×××が頭を擡げる、戰爭を根絕させるがための戰爭、自由のための戰爭といつた出來合標語の煽動時間は餘り長く續かないものである。

反戰爭思想に結付いた××的內亂が戰費の重荷を投出すことによつて安逸生活に入らうとするそれを利用してソビエートを造りあげた、その他では××主義は半熟であつたが戰前に比較すれば非常に增加した。

戰爭退屈心理が平和苟且主義を醞釀して、どの國にも無產××運動が地下流動的となり、

戰勝國にさへ經濟的混亂に乘じて彌蔓した。**戰爭が長引くことはその勝敗の如何にかゝはらず結果は資本主義に取つては恐るべきものであるがゆゑに、平時において戰鬪準備を充實させる、戰爭の準備が完成してゐない時は速戰速決ができないからである。**

速戰即決主義は、いつでも多數の軍人、軍屬、軍需品を準備せねばならないから租稅の輕減は望まれない。從つて物價は騰貴し貿易は原價高によつて輸出困難となるばかりではなく國際的憎惡によつて民族的にも排斥される。こんな經濟的に不利益な軍備を持ちながら、それを使用しないで單純な飾物として置くことはもつたいないのみならず軍人を退屈させるから機會をみて使つてみたいといふ野心を起すことは資本主義國家の無理もない驕ぴである。

戰爭は演習とちがつて毎年起るものではないから戰爭は珍事である——支那のやうな慢性的內亂國は別として——。士氣を落すまいとして小づら憎いそして恐ろしい相手を——假裝敵國を製造せねばならぬ。日本は×國によつて製造せられたそれである。

國家主義祖國擁護の油を平時において、特に兒童のうちから十分に注入して置けば有事の時には殉國的感念として盲目的に燃え上がる。その主たる役割は學校、敎會、新聞、愛國團

體が勤める。別働隊としてラヂオは聽神經からキネマは視神經から、時としてはレコードも義勇報國皷吹の流行歌で踊らせる。

H

人は銘々に自分自身以上の何物かを持ちたいやうである、それは神である、神を別として他に何か自分より一層大切にして神聖な他力を持たねば、生活に賴りがないやうな氣がする。それは祖國だ。もしくは祖國を表徵する國旗である。祖國のためになら自分を犧牲にして働き國旗の下では笑つて死ねと敎へられ自分もそれを承認した以上は祖國は自分より以上のものである。情熱的に飛び込んで行くものと冷やかな義務感に動かされて行くものと、どちらも自分以上のものに對するサービスである。共產國家でいへば祖國に代へるに主義をもつてしただけの差違である。

愛國心を眞先に立てゝ自分のインテレッセを後廻にしなければならないのが人間のつらひところである。祖國は自身以上の聖物であり吾々は祖國を戀してゐるから祖國を離れて流浪

するより死んだがましだとすれば愛國心は命がけとなる。「勞働者の提携が第一、×××はそれが濟んでからゆつくり考へたらいゝものだから第二義である」といふ××主義者でも擧國一致の潮流に流されたら、いきなり戰場に飛込んで激しい憎惡感念をもつて戰ふことは歐洲大戰で英國の勞働黨員がやつたことであり近くは日本で上海事變が起つた時にも無產黨員の殆んどが軍部の政策を支持したことによつても知られる。その時は內地で總選擧が行はれてゐたが無產黨の投票數がその掛聲に比して極めて少く、無產階級が一齊に對支强硬の政友會に熱が燃えた一票を投じた。

眠られぬ夜中に靜かに考へてゐる時は自分が戰爭に向つて××××をやることは何となく犯罪者のやうな氣もする。××な心から私怨のない他國人を無慈悲に××××態度は果して××××であるや否や、といつた問題に出逢ふであらうが、米國式焦燥生活はそんなことに結論をつけさせる餘裕を與へないで、祖國愛を鼓吹して大ぜいで汝の敵にぶつつかれと敎唆する。戰場に臨んだら人道なんかを考へてゐた時の氣分とまるで違つた感念が頭に一ぱいになつて、自分自身が可否の判斷を下すことなしに祖國のために國旗のために進軍ラッパに歩

調を合せて指揮刀の指す方向に邁進する。

英國がやられた苦杯が今度はなみ〳〵と注いで日本へ廻はされた、その次はどこに廻る。米國だつて安心はしてゐられまい。

二

奇妙なことは、最も奇妙に思はれることは、英國が支那と戰ふ時に印度兵が英國に忠誠を擁んでることであつて、僕は常に感心してゐる。支那は列國共同の搾取場であり印度は英國獨占の搾取場で、少し趣は違つても被搾取者たることは同一である、英國の侵略は印度兵を先頭に立したが、**印度人が支那人を攻める何の理由があるのであらうか。**

一九一九年ローラット法が布かれてから印度大衆の壓制的法規に對する、それは潜行的のものに過ぎなかつたが、大衆は英國に反抗した。しかるに印度巡査は支那において英國の權益を擁護する。排英運動にも働く、香港で支那人が排英罷業をやつた時にも印度人はストライキ破りに使はれた。歐洲大戰にも參加した。支那の大衆運動は相當な刺戟を印度、埃及に

興へてゐるといふが、果していつまでも英國のために支那人に働きかけるであらうか、日米戰爭が起つた時にフキリツピン人はどの程度の忠誠を米國に仕拂ふであらうか。

部分的にはいろ〳〵の抗爭もあるが、アジア全體を世界的高所から眺めてみると驚異すべき或る結論に到著するやうである。

遺憾ながら日支間の紛爭も今から十年ばかりは續くであらうが、その戰爭まで引入れられた行違ひも深刻な血の教訓によつて双方から諒解し合ふ機會が來るであらうし相鬪ふことの無意義は自然に敎へられるであらう、それは悲しむべき衝突の過程を通つた後のことではあらうが支那のインテリの頭が平靜に復へるまで、氣永く吾々は待たうではないか。

日支が爭つてゐる間にアジアの富は米國へ流れ込むこと、ちやうど歐洲大戰が米國を成金に仕上げたと同じことである。アメリカは今ヨーロッパの富を乾かしてしまつて北米合衆國の富は英、伊、獨、露、日の五國を合せたものより大きい、英、西、伊、波、支、日、加、印の九國の合計と匹敵する。それが十五年前には世界の第五位にゐた國であつた。

一躍して强盛になつた國は又た一躍して貧弱となることが多い、なぜならば歐洲ほどの固

い基礎の上に立つてゐないからである。繁榮の列は環る、環つて歐洲からアメリカへ行つた繁榮の前列は今アジアに向ひつつある、日支が融合したら、それがアジアに進んでくるのである。

世界繁榮の中心は現在においてはアメリカ、未來の疑問としてはソビエート、それから未來ではあるが確實性を持つ支那と、この三つである。現在では各國の富は米國のカバンの中に入つてしまつて、その包容力の大きさは驚嘆されてゐるが、驚くべしその鞄は底が破れてゐるから、いくらでも包容できるのである、併しそれを提げて道中のできるわけではない。

アジアにおいても經濟界に混亂は起りつゝあるが、それは根柢をアジアにおろしてゐるものではなくして歐洲からの輸入品である、歐洲諸國のやうに極度まで爭はねばならぬほどの基本的憎惡はない。

僕らは白人に向つて次のやうに宣告する時があらう……アジアはアジアの自由に任してもらひたい、君らの文明は間違つてゐたのだ、火藥臭ひ文明はお返しする、君らの指導なくともアジア獨特の文化は建設される、治安に害ある君たちよ、早く本國に去つてくれ……と

支那が立直る時は遠くはあるまい、その時はきつと日本と友好關係が堅く結ばれてゐるであらう、日本と爭ひ續けたなら支那は倒れることはあつても立ちなほる見込はない。日支の提携は印度、埃及、フヰリツピン、安南、トルコに影響なくては濟まないであらう。支那は國際聯盟に縋つてゐるが、聯盟は歐洲の虛僞だ、平和會議は米國の私有である、そんなものを賴るな。と吾々は叫ぶ、支那はなぜ「贊成」と叫ばないのであらう。吾々アジア人は今有意義な歷史を書きつゝある、アジア結合こそは有色人の眞の心であらねばならぬ。

J

假裝敵といふものは巧妙に造りあげられたら被壓迫國民でも壓迫國民を助けて働くであらう。被假裝敵國は安眠することができないから對抗的に、報復的に相互に假裝敵をつくつて軍備を競爭する。こちらから相手を睨むことによつて、相手も同じやうに睨みかへす。相手國の軍備、要塞、地理などにさぐりを入れてスパイが入り亂れて危機を製造し、相手の弱點を握つて何時でも立上る用意を完成し、何かの機會をみて突き當る。その時に退屈が償はれ

る。

戰ひとなつたら敵の人命を損傷することが最高の道德によつて是認せられ正當化される。正義のため、國威のため、神聖のため、權益のため、國のため、身のため、子孫の爲め、そんなものゝ合計の爲めに戰ふことは味方が最善であり敵が最惡である、最惡のものゝために負されることは神の名において最大級の恥辱であるといふ强く打込まれた信念によつて動く。勝つたものが勝利で、負けたものが負けである、それが眞理なのだ。

歷史は他國を破壞することに因らずして一の國家に榮光と繁榮と覇權とを與へた記錄を持たない、道理の正否は第二として戰敗國は幸福を失ひ人命を失ひ國土を荒廢せしめられ謝罪金を支拂はせられる。家を燒かれ耕地を掘りかへされた、その損害と賠償金とは一代では支拂はれないで義務は次の時代の人々にまで貽される、こんな大きな投機は決して無い。

歐洲大戰に三千八百萬人の死傷者があつた、その中に行方不明者が七百萬人、この行方不明者といふのは砲彈、重爆彈によつて骨も肉も微塵となつて飛散したものが多い、そんなことをして歐洲大戰は何を意義したか、退屈さましとしては餘り多い犧牲ではなかつたか。

彼らの大多數は何のために、又はどちらが果して正義であるかを比較研究する時間を與へられないで戰場へ驅り立てられた。國家としては正義であらうが無からうが、そんなことはどうでもいゝ、勝ちさへすればいゝのであるから國内大衆をして無條件で正義であると信ぜしめたらいゝのだつた。正義のために起つといふ信念は攻擊に力づける。正義の鼓吹の仕方によつて軍隊は一割も二割も時としては二倍も三倍も強くなる。

正邪を批判する腦力を持つた兵士は好ましい兵士ではなく、自國の行動に懷疑心を抱き戰爭の定義を考へるやうな軍人は敵の間諜より恐ろしいものである。たゞ默々として、しかも亢奮を續けて、死地に突進させるのが戰爭の定義である、この定義は無茶である、無茶な定義から出た戰爭は無茶より出でゝ無茶を過ぎ無茶に入る。

K

脚もとに地雷火、頭上に爆彈、これでは退屈してゐられまいと思ふのが日本人であつて、白人たちは塹壕の中で毎晩トランプをやつてゐたといふから恐怖に慣れると又た退屈する。

上海事變でもさうであつた、日支が相撃ち出す砲彈の下で商賣ができないといふ不平、それはわかつた不平であるが、ダンスホールが開けないといふ不平、それは白人たちが長き夜を退屈するからである。あゝまで歡樂に慣れてゐては一週間でも歡樂と絶緣することは苦しいものらしい。

「敵國外患なきものは國常に亡ぶ」ださうだが、國家は内亂で腐蝕し外患で緊張する。支那のやうに内亂も外患もともに有つてゐる國は亡びるやうで亡びないやうで、そのうちに國力は少しづゝ進んでくるといふから規則で律せられない存在である。平和のために衰亡した國は歴史に痕跡が多い、油斷、倦怠、奢侈で國家は大欠伸する、欠伸した口の中へ彈丸を撃ち込まなくとも小さな黍團子を投り込んだら窒息死に到る。欠伸は倦怠の表現であるからその油斷に乘ずれば一個の團子でも命をとる、その團子には猫いらずも何も仕組む必要はない。

退屈した時分にはお祭騒ぎをやる、農村でも都市でも春、夏、秋といつたいゝ時候に始まる、輿論も同じく煽動家の指のさす方向に踊る。輿論とは何ぞや、お祭り騒ぎであり神輿の

論である。

輿論といふものは譯のわからぬものである、わけの譯つたものは輿論ではない、神輿を昇ぐものは、その中に何が入つてゐるかを吟味することなしに擔ぐのだが、その中に何が在るかを吟味しようとするやうなものは本當の信仰者ではない、罰當りものである。

思想家は「理」の指すところを信じるが、信仰者は「神」の告げるところを信じるものである。

ポピュラー・ヴオイスは衆愚の附和雷同した善意の聲であつて、民主主義政治の寛大有効な働きを擁護し、革命的叛逆者に向つては圓滿な防禦要塞となる。

善意の錯誤が時としては輿論の形を成して國家全體を不幸に導くことがある。對外戰爭といつた鬪爭的感情の灼熱した時に、熾烈な雰圍氣を利用して憎惡熱を煽ることは易いが、反對意見を披瀝して民衆の聽くことを望まざる政策を說いて、誤つた熱狂を冷却せしめることは難事である。しかしそんな反對者も必要な場合がある、賣國奴と罵られることがあつても自信を枉げないことは感ずべき英雄であつて、戰場で敵陣を陷いれるより以上の勇氣を要す

ることである。併し——この併しは重い反語をもつ——しかし衆愚の中にそんな思想の操持者の交ることは社會を混亂に陷れしめ敵の乘ずるところとなつて勝を變じて敗とすることが多い、**一人の賢さは百人の愚に及ばないのがデモクラシーのいやな點である。**

神輿昇きの中に左へ行かうとする大衆に逆らつて右へ行かうとする少數があつたらお祭りの行列は亂される、汗だくで非理性に騷いで、それを輿論なりと盲信してゐるものを反對の正しい方向に向けしめようとして僅かの言葉の行違ひから氣短かな神田の兄いに袋叩きに逢ふこともある、そして神輿は思ひがけなく他人の塀などにぶつゝかつたり河の中に人とゝもに顚落することもある。

L

軍縮會議が始まつて大衆が反對してゐる中に少數の贊成者が頑張るとしたら國內不統一の弱點が外國の乘ずるところとなつて國家の不利益になるやうに、少々は間違つてゐても大勢に順應する方が國家の利益となる。輿論が力强く動き出した時は智者も智の施しようがな

く愚物でも群集心理の中に加はつて胡魔化して通れる。

政黨には外の輿論と内の輿論とを調節して行くところに領袖のむづかしさがある、外の輿論とは大衆の要求するところである内の輿論とは陣笠多數の希望である。そんな愚論でも謹聽して贊成したやうな顔して輿論のオンパレードを指導して、辻にきたら巧に針路を轉換せねばならぬ、馬鹿げた政策でも新らしく目先を換へることに役立つから退屈して萎縮してゐるよりはいゝことである。そのために政黨本部に碁盤を置いて退屈させないやうに笊を戰はせて置く。どうせ代議士といふものは七分の無鐵砲と二分の智恵と一分の運とで當選したものであるから扱ひにくいやうで扱ひよいものである。

中央の政情に疎い地方黨員が上京して領袖に愚策を献じると、さも感心したやうな顔して傾聽しなければならぬ領袖は退屈であらうが黨員は策の聽かれたのを悦んで亢奮するから自ら退屈しても衆愚を退屈させてはならぬ、なぜならば退屈したら黨費を納めない、脱黨もする。

馬鹿に交つて默つて擔がれてゐる總裁は自ら退屈して黨を太らせる、それが既成政黨の大

を成したゆゑんであるが日本の無産黨は黨首が利巧ぶるからちきに分裂する。女給はお客の諧らぬ話でも面白さうに相槌を打つてゐるからチップに有りつくが、退屈したやうな顔をしてゐたら生活はできない。お客を退屈させるから落語は衰微した。歌舞伎でも大向うを唸らせるのは輿論の喚起である。

輿論といふものは鑑識眼のないもので十錢ストアのやうなもの、數は多くあつても同じやうな價値の安すものが紛然として列んでゐるに過ぎない、めつたにダイヤの指環なんか交つてゐるものか。

そんなものに雷同しなければ政治でも藝術でも宗教でも新聞でも發展しないのであるから相續いて墮落する、お互さまに淺墓な智恵で世を渡つて行けることは結構であるが、人生の誠の味はデモクラシーで水臭くなる。

M

どんな人でも、どんなうさ合ひの友だちでも自分と同じ程度の智識をもつて自分の思つて

ゐること〻同じことを考へてゐるものはない、無理にそんな異つた程度のものを包括して、人間同志を集めて心を戮せて社會を組織することが根本的において出來るならば、僕らは犬とでも蛇とでも蛙とでも一しよに平等な權利を持つた動物社會を構成することができるであらう。たゞ併し**そんなものを造り上げても詰らないことである。**

自分が個性を固く保存して一個の人格を維持しようとすれば勢ひ孤立になる、孤立は靜寂を愛好する獨善人のみが樂むところで衆愚は大勢と一しよにわい〳〵騷ぎながら暮さねば退屈するから個性といふのが泡のやうに、ちよつと現はれることはあるが、すぐ人波の中に消えてしまふ。しかし社會協力は個人で氣張つてゐるより大きな仕事を仕上げる望みがあるから米國では株式會社が流行して大株主のために小株主の小利害は消されてしまふ。

株式會社は信仰で結びつけられた團體ではない、たゞ營利といふ主義によつて組み合されるのであるが會社は小株主の所有ではない。**小株主は會社に所有されて、二三の少數大株主が重役となつて會社を所有する。**

國際聯盟でもその成員である弱少國家はフランスに所有された。力が強くて利巧に立廻る

ものは自分の思ふまゝに處置することができる、それは吾が物である。共產主義では所有者を社會とし、その社會を幹部が所有する。**所有慾のあるものは善良な人ではない。**アジアは日本が所有してはならないやうに支那人が所有してもならぬ、まして白人は一時的に借用することも罷りならぬ。

實際において侵略主義といつた舊式な考へは死んでしまつた。死んだものは子孫を繁殖させることはできない、いま侵略主義に代つて現れ出た將來有望の兒はアジア人のアジアといふ新らしい名を持つた寧馨兒である。

吾々は內輪喧嘩してアジアを碎いてはならぬ、それどころかアジアを現狀以上に高めやうといふのである。アジアを暗殺しにかゝつてゐるものを追つ拂つて保全の義務を盡さねばならぬから個々の道理のある個性を棄てゝ、道理の有無にかゝはらず有色人はお互に協力しなければならない。國家は輿論一名野次馬心理を必要とする。

輿論は機械製造品と同じく何個でも何人でも同じやうなものを集めて成立つ。機械製品は自分の弱點を隱蔽するために修飾するから中味十錢の香水に包袋費がその五倍もかゝる、文章でも低度な大衆讀者に買はせるため何でも纖密に描寫する、「餅」といふ題で筆を取るとしたらその原料から製造法からその歴史からその味まで上戸にでもよく呑み込めるやうに書いた上に、入れ歯で噛んでは危險だとか、黴びたら水餅にするがいゝといふ點にまで細かくやつてのける。それが現代の大衆作家で、機械を組立てる理づめで行つたら困難ではないが、分解してみれば詰らない冷たい鐵片に過ぎぬ、これが輿論の正體である。

國家の輿論は多く誤つてゐる、或は誤らせてゐる。國民の聰明を蔽ふやうな政治によつてさうなつてゐるのである。外交にも軍事にも秘密があつて國民は正しい判斷をする資料がないし、又た國民個々に判斷をしてもらふ必要もないのである。新聞だつて政黨又は富豪の機關に利用されるから一新聞だけを讀んでゐる人の思想が一方に偏することは免れ難い。ソビエート國の資本思想排斥、ファショ國家の勞農思想締め出しによつて兩國民は決して批判力を與へられてゐない。從つて國民には正しき輿論はない。日佛同盟說でも噂だけは外國新聞

で讀んだことはあるが日本もフランスも國民は眞僞を知らない、噂が立つだけでも日佛間に共通した何かの關係がある、共通したものが無かつたら噂だけでも流布しない。たとへば日米同盟說を流布しようとしても誰も相手になつてくれないが日米戰爭の宣傳なら物にならないことはない。**しからば日米間には同盟說を笑つて戰爭說を傾聽せしめる氣分が橫はつてゐるものといへる。**日支戰力は噂だけでも早く立てたいものである。

〇

ソビエートの計畫が軍事を中核として魔の進行を續けてゐるのは日本の白色恐怖があるからであり、日本において思想研究が活氣をもつて論議せられてゐるのは隣りにソビエートの恐怖があるからで、軍事と思想とのために兩國民は緊張せしめられる。ソビエートが不可侵條約の締結を日本に持ち込んだのは日本の陸軍が氣にかゝるのであらうが、日本がそれに應じられないのは赤色宣傳が油斷のできないからである。支那のやうに內憂外患が交々起つても、緊張してゐるのは一部のインテリだけであつて大多數の人々は何とも思つて居ないで退

屈してゐる。春の海、終日のたり〳〵哉の呑氣さである。實力政治家は私腹を肥やすに忙しく、意識のない輿論の動きは波の無神經な起伏と異ならない。

日支間は支那の誤つた輿論によつて意義を成さぬ衝突を繰返へしてゐる。しかも國民相互間には何の爭ふ必要をも見出さない。歐洲大戰を經て戰爭の目的は訂正されて次のやうな九綱目となつた、**そのうち日支を相戰はす目的物はどれであるか。**

一、敵國の完全なる征服。二、敵の戰鬪力の破壞。三、脅威の排除。四、土地の占領。五、權益の防衛。六、通商路の開拓。七、利潤搾取。八、分捕金品（賠償金を含む）。九、經濟力の破壞。

日本としては對支外交は割合に消極的で、たゞ第五の既得權益に對して頑張るだけで、第一、第二、第四、第八、第九の如きは決して日本の目的としてはならないものである、戰鬪力破壞も要するに一時的手段であつて目的ではない。

日本は支那を剿滅してはならぬ、又たできないかも知れない、洪水、飢饉、政爭、內亂等による自懷作用でどんな結果に落ちて行くかも知れないが、外國の壓力で支那が亡びること

は有り得べからざることで、支那の一部が驕いでゐるのは、彼れは幽靈をみたからである。

幽靈は弱いものを目がけて現はれるものであるが、それは野蠻人だけを脅かすための虛の存在と思つてはいけない、強いものほど幽靈を見、文明人ほど亡魂に魘される、假裝敵國は現代の幽靈である。

國民が軍事費の重荷に堪へず納稅に倦怠を感じる時には幽靈は現はる。彼女は恨めしいとは云はないで恐ろしいぞといふ。稅金を納めて軍事を充實せねば化物が君らを食ひにくるぞと脅かす、日本はロシア、米國の幽靈の種に使はれて軍備が充實すれば幽靈といふ空のものが戰爭の實となる。

不戰條約、平和協定は幽靈を恐れる文明人が集つて脅威排除策を講じたものであるが、調印國自身が相互に幽靈であるから條約面の文字を實際の正貨に兌換しようとした時に強國は**果して金色燦爛たる正貨と引換へてくれるであらうか。**

野蠻地の土人などは戰爭といつたことを、まるで考へてゐない。文明人は今挑戰的な周圍の情勢に自身を適應させるため軍備を尖鋭化して他を攻擊するか、軍備を弛緩させて他から

の攻撃を甘受するかのどちらかの問題に回答を迫られてゐる。

臺灣の蕃人の首の取り合ひは戰爭とはいへなかつたがスペイン人、オランダ人が銃を賣りつけてから、やゝ戰爭らしい凄いところをみせた。總督府が兇器を取り上げてから又た縮んでしまつた。野蠻人は銃の製造法を知らないから狙撃が上手でも近代戰爭觀念からは戰爭とはいへない。文明國は自ら戰ふだけではなく平和人に兇器を賣りつけて戰爭の趣味を養はしめる、バルカン、支那における爭鬪がそれである。

未開人は機械に惱される度が少いから生活は割合に幸福であるが文明人は今苦難の中に呻吟してゐる、機械が今日のやうに横暴を極めなかつた以前には消費力が供給力より強かつたから商人はもちろん農民も官吏も幸福であつたが、機械が大自然の法則を破壞するに到つて僕らは修羅道に突き落された。**機械の音だけは妙な響がする、それは大砲の音と共通した惡魔の響である。**もし人世に機械が無つたら人口の增加は消費力を增すため、どの市場でも買ひ手が溢れて非常な繁榮を呈し、今日の反對に物資の爭奪が始つてゐたかも知れないが、そんな幸福は今となつては夢である。

大きな優秀船、網の目のやうな航路、それは皆損失の通路である。船は動くたびに損をする、飛行機は飛ぶたびに補助金がついてゐる。こんなことは資本と勞働との浪費であるが、戰爭が有り得べきことゝせば、想像せられた未來の戰爭の豫行であるからそれを中止することは戰爭に負けることである、**戰爭は無益の破壞であるが商戰も資本の破壞である。**

文化の高度に發達した國は同時に武器彈藥製造工業の中樞地である。科學によつて發明を機械によつて物資を、鐵道、航空機、船舶によつて交通を、そんなものゝ蓄積が戰爭を唆る力を蓄積したらそれを使つて、その成果を見たいと思ふのは當然に到達する慾念である。知識、資本、勇氣、**そんなものゝ最も强く活動するのは戰爭である。**

亂世の梟雄といはれる資質を持つたものは秩序の整つた治世においては兇力を發揮する餘地がないから退屈してゐる。大名祭、大利益を攫み取らうとする機械は戰爭より善き時はない。**そこで戰爭は製造される。**

その五　戰爭史觀

A

文化の進歩が戰爭を阻止するといふ學者の定說が確立した頃に歐洲戰爭が起つた。貿易が盛んになれば各國の利害が相錯綜するから戰爭を阻むといふ說が、貿易の尖銳化が戰爭をつくると更改された。文化の進みは他國の知らない特殊な新銳武器の製造研究に焦慮せしめ文化都市が軍需品工場の中心を成し、**科學の全力はそれに向つて沒入した。**

現在の歐洲はあれで平和なのであるが、軍隊が動かなかつたら、たとひ作戰計畫が進められてもそれで平和な夢が見てゐられるのであらうが、その夢の覺めるのを惜むほど現實な人間生活は苦界である。

金融戰は武力より强い力でドイツを破りイギリスを覆し、金の累積に却つて米國を脅か

した。フランスも金融戰に登場した。**そんな戰爭狀態がアジアに密輸入されて絕東においても不穩な渦が卷き始めた。**

アジアは未開であつたから歐洲大戰に比べると殺戮法も兒戲に類してゐた、後漢書に伏屍百餘里といつた恐ろしく長い形容を使つてゐるがそれは紙上の數であつて實數でないこと勿論である、支那の歷史に駄法螺が多く、それを師とした日本も法螺を傳染されてゐる。

B

北條が楠氏を河內に攻めた時に關東勢が八十萬と稱せられたが、その十分の一でも尙ほ多い、五分一でも少いとはいへない。

項王の兵、灞上に在り、百萬と號す。(史記) 灞水の上に陣取つてゐる項羽の兵は、いくらだかはわからないが自稱百萬であつた、この「號す」といふのは宣傳で、百萬とは宣傳そのまゝを史上に載せた兵數である、日本の歷史でもその通りの誇張がある。併し歷史といふものは必らずしも正確な事實を傳へる必要はなく、嘘であつても差支はない、創作であつても

此ごろの大衆小説より面白くていゝが、**ただ人間の生活に添つたものであれば、それで滿足しなければならぬ。**

北條勢が八十萬ならば京都から河内まで戰線の銃後に十數萬の非戰鬪員が列を造つてゐたに違ひないが、戰の縱線が長いから草賊を集めた南軍に糧道を絶たれて自潰作用で敗北したものであらう。

楠氏の成功は抵抗繼續時間の長かつたことである。著るしく優勢な敵に對して抵抗を長く續けることは、それだけでも戰術上では成功と見做される、まして援兵が共同防禦に合流する機會を與へ得たならば大成功といはねばならぬ。歐洲大戰のヴェルダンの役が千早の戰に似たところがある。

中世には常備兵といふものが無かつた、農民が鍬を抛つて兵となつたこと現在の支那において苦力を集めて軍隊を造るに類してゐる。戰爭の本質は他の領土を侵略することによつて巨大な富が持來されるといふ慾念から征服慾を國民に注入し、軍人に對しては位階、土地、利益の分配によつて一致せしめたことは組織的な掠奪團のやうなものであつた。

小さな集團が勝利によつて急速に飛躍して大きな集團となり、戰勝地には戰敗國からの分捕金品が貢物とゝもに積みあげられることは聚樂時代の京阪の繁榮を招いた。

C

必然の計畫が偶然の機會に授じ非常な効果を戰爭の結果に及ぼしたことを史家は名將といふ、名將といふものはそんな單純な出來合品ではなくして智慮、戰術、人望、勇氣、そんな複雜なものゝ集合構成であるが、僕はそれを單純に智と運との二字で片付けて好からうと思ふ。何百何千萬の死活を擧げて少數將帥の智と運とで決定してしまふことは餘り無責任なやうであるが、人間の智慮で及ばない空間が敵と味方との間に存在するから、敵が思ふ壺に嵌つてくれたら庸將といへども大功が建てられる、勝負は敵の出やう次第でもある。

參謀本部、軍令部で周到な計畫を樹てるが臨機の處置は司令官の機智に任せ、それ以上は運命の指すところに任せるのであるから戰爭は「金」に始まつて「術」を過ぎ「運」に終る。

秀吉が天下に覇者となつたのは光秀のおかげであり、信長の賢い嫡男が死んで——身投げ

した婦人が美人であり、死んだものは賢いといはれることはあるが――愚かな二子が生殘つたのも、勝家一益が東と北との強い相手に向けられ秀吉が弱い中國に向けられたのも、毛利が織田の危機を利用しないで秀吉と諒解したのも、そんな小幸運が秀吉に集中した偶然の大結果で、英雄首をめぐらせば天の命である。

平和は戰爭と戰爭との息つぎに過ぎない、平和の時は戰爭の時より長いかも知れないが、**百年かゝつて建設したものを一日で破壞するから平和と戰爭との長短はただ年月だけで力を比較することはできない、**戰國時代は擬人化せられた集團の決鬪であつた。

D

長篠の役に武田が一敗地に塗れて復た起つ能はざるに到つたのを史家は勝頼が父信玄の武勇に如かなかつたことに歸するが、僕はさうとは思はない。一騎打ちにおいて木曾勢が京都兵より強かつたやうに、同じく山地の甲州勢は中部人より優つてゐた上に行軍の艱苦に堪へる力も強かつたであらうが、織田氏は京都に占據してから軍隊を文化的に改變したことは織

田武田の決戰において現はれてゐる。

それまでも京都は享樂柔雅の地であつて、そこに據ることは一種の誇視ではあつたが、現代において大阪、ニューヨークが政治的よりも軍事的に重要な地點となつたやうに、京都の工業は軍需品製造場の中心となり、甲冑、刀劍、弓盾、特に火藥が武器として、又た食料被服等、戰時の後衛として重大な役割を演ずるやうになつたが、武田の領土にはそれが無かつた。

銃の渡來は戰爭に火藥革命を起さしめた、銃を何よりも信頼したのは織田であつた、攻擊的に銃を信頼するとゝもに防禦的には盾を――今日の塹壕のやうに――信頼した。

かやうな武器とゝもに戰術も一變した、そんなことは文化に遠かつてゐた甲州の知らなかつたところであつた。甲州勢の肉彈と手道具（劍、戟、弓、少數の銃、盾は極めて少かつたに對して機械（銃と盾）で對抗した、飛道具（銃）が武人として恥づべきものなら弓矢も飛道具であり槍、刀も手の延長であるから同じ譯合のもので、それを信長の卑怯に歸するは正しい見方とはいへない。

E

元龜天正時代には道路も狹く運輸の方法も完備しなかつたから糧食、裝具等の關係から十萬二十萬の兵を動かしても、（たとへば關ケ原のやうな平野戰においてすら）それ全體が現實に戰鬪に參加したことは少くして過剩兵力は遙かの後方にゐて聲援を爲し先鋒に飛躍力を與へるに過ぎない、時としては足手纏ひにすらなる。山崎合戰のやうに先陣爭ひが起るのはそのためであつた。

戰爭には危險が附隨する。奇功を樹てた戰勝は嚴密な打算に缺けるところがあるだけ、敵の不意に出でゝ勝を制する、桶狹間における信長の奇襲がそれである。敵が後方に強い守備を設けてゐたら歷史に輝かしい驍將も脆く樹林の下に露と消えて、馬鹿々々しい冒險家として後世に嗤はれたであらう。

強行軍、秘密、迅速、決斷、偵察の五つは奇襲の要諦で、嚴島、鵜越その他戰史の花々しい場面を飾つてゐる。正攻法では負けるはずのものを精神的壓倒によつて敵の元氣を挫き

理外の勝を占める。しかし今日では強國といはれるほどの國家の間には戰爭技術において優劣の差が少く、偵察機關が備つてゐるから寡兵をもつて敵を破ることは困難とせられる。

信長は短兵奇襲をもつて桶狹間に起り飛道具をもつて大成した。**謙信といへども晩年には織田の科學部隊に對して勝味があつたものとは思はれない。**

F

總帥は流血の惨狀を目前にして慈悲に燃えてはならぬ、又た無慈悲であつてもならぬが慈悲よりは寧ろ無慈悲の方がましである。この意味において文學者であり歌人であり能筆家である平家の公達は良將ではなかつた。平家の都落ちも作戰を誤つてはゐない。あの場合には退却も一手段であつたが、衣冠の徒は京都を離れたら勇氣を冷却する。

大敗した後には士氣が挫折して復讐感念が麻痺してしまふ。局地戰に負けても尙ほ戰鬪力の殘つてゐる時には報復の意氣は旺盛であるから主將はそれを利用して更に勇氣をつけるが平家の都落ちの後においては京都奪還の勇氣は殆んど消えてゐた。

慘酷な戰を經て平家の戰意は沮喪してゐるから知盛、教經らは死灰に油を注いで再び炎を擧げようと力めたが、總帥の宗盛が柔弱で、その意氣が大衆の勇氣を奮ひ起たせるに堪へなかつた。慘虐に對する涙のあるものは終局の勝を望めない、激戰の最中に眼をつぶつて野戰病院の光景を念頭に浮べるやうな氣分が起きら、戰は明かに負けだ。

維盛が富士川を隔てゝ源軍と對峙した時に、東からくる旅人の情報によつて惑はされ、三萬の敵を三十萬と十倍に擴大して判斷した、こんなことは現在でも行はれてゐることであつて米國の戰鬪力が日本へ、日本の戰鬪力が米國へ、相當な誇大をもつて傳へられてゐる。眞僞、過小、誇大、捏造等の無責任に報ぜられた情報の斷片を綜合して國防計畫の基礎とするのであるから、どんな智者でも誤謬に陷ることは免れないことで、よく考へてみると戰爭の計畫ほど賴りないものはない。戰爭の訓練が十分でなかつた憶病な、たゞ家柄ばかりで軍の主腦となつた維盛が水禽の羽音に驚いたのは嗤ふべきことではない、**水禽の羽音が飛行機の爆音と變つただけの現代である。**

G

デモクラシーの行はれない以前においては、戰爭は將帥の復讐とか侵略とかの目的から行はれて政治的手段でなかつたため人民は軍の精神とは何の關係もない傭兵であつたが、個人の格鬪とちがつて軍隊は經濟その他の複雜な組織からできて敵を潰滅させるまでの過程において種々の困難に出逢ふ。

木曾義仲が都攻めにおいて先づ叡山を占領したのは土地侵略が目的ではなくして山下に在る平軍の戰鬪力を破壞する示威であつた、戰爭の脅威は形而下の殺傷だけではない、馬を立つ吳山の第一峰といふ詩句があるやうに叡山の高峰に白旗の飜つただけでも平家の精神的戰鬪力を潰滅させるに十分な効果のあつたことは歐洲戰爭においてドイツ飛行船がロンドンを襲撃したのと類似してゐる。

源氏の志は復讐に在つたから平軍の西奔に乘じて追擊戰に轉じなければならなかつたが源氏は遠征したため被服糧食の缺乏から京都の豪戸を掠奪しても尙ほ不足であつた、勞ひ休

戰するの餘儀なきに到つた。

戰國時代は間斷的に戰つたから戰爭の永引く割には軍資金は多くを要しなかつたが戰鬪員の補充のため休戰したり糧食が不足して退却したりしてゐたものである。近代戰爭には糧食軍需品――その後に工場、機械等が軍隊の組織の後方に準備されてゐるが、それでも豫算以上に彈丸を浪費することがあり、兵砿の缺乏を訴へることもある、義仲の遠征には後續部隊がなかつたから京都で窮したのも無理ではない。

H

強制徴發に應ぜしめられた壯丁を除いて農民は戰爭と無關係で、戰爭は双方の職業軍隊間にのみ戰はれた。食料以外の生產品――たとへば草鞋、陣笠、弓など――は農民の副業で、群雄割據に累せられてその賣買も周圍五十マイルの外には出なかつたから大規模な交換經濟は成立しなかつた。

かういふ運輸機關のない時代に木曾から一氣に西海にまで窮追することは不可能であつた

その間に源氏の內訌があり、ために平氏は繩原に勢を張る餘裕を與へられたが、これを義仲の遊情に歸するは當を得ない。休戰も戰鬪の一時中斷的繼續であり次いで起るべき第二次の戰ひに應ずるための準備と休養とに必要なるものであるから、それも戰鬪期間の中へ加へらるべきものである。

陸戰において源氏は强かつたが海戰には狎れなかつたのは地理的理由による。歷史において戰爭は殆れど陸戰であつて四面環海の日本において海戰がなかつたのは英國のやうな國情の下に置かれなかつたからである。スペインの無敵艦隊百三十隻といへば大袈裟であるが、トン數にして總計六萬トンに滿ちなかつたから現代の戰鬪艦の一隻にも當らぬ、日淸戰爭以前には海戰らしい海戰は日本に見當らぬ、上海事變滿蒙事變には飛行機の空中活躍があつて始めて日本の歷史家の眼は地から水へ、水から空へと動き出した。

I

×國を假裝敵とするに到つて日本の海軍に急に膨脹した、日本の組織的機能の中で海軍は

比較的短時日の產物であり兼ねて急速な大踏步でもあつた、空軍は陸海におくれて、今大急ぎに追ひ付かんとあせつてゐる。

古代からの戰爭三要件である天時、地利、人和の三つのうち天時は國際氣進の動搖によつて定まつた時がなく、地理は飛行機の發達で抹消されてしまつた要塞でさへその防守力の大半を失つたことは上海事變の吳淞砲台がその適例である、天險の利用は戰爭の强き條件であつたがそれも航空機、自動車、戰車等によつて力を弱め、人和のみは依然として背後の勢力となり「人和」は「擧國一致」とか「國家總動員」の名に呼び換へられた。

敵狀偵察機關が不完備な時代には無謀に近い膽力が軍に總括的勇氣をつけ、後世の史家がその無謀が却つて男性的であり、史を讀んでもはら〳〵させられるやうに、當時においても部下の兵士が冒險的興味に陶醉したことであらう。それが文化の現代にも殘つて、やはり人間には不健實な冒險的遊戲を愛好するやうな半面性を持つてゐる。

近代戰爭は動機が政治的理由から出發し、戰略が數理的となり營利的となり、打算的となつて亢奮、感情等を作戰計畫の上から驅逐してしまつたとはいふものゝ、戰爭そのものゝ本

質が規準的のものでないかがゆゑに勝敗の全部が兵力の强弱によつて定まるものではなく一部分は人間の膽力の及ばない偶然性の支配するところとなるから、どんな人でも勝敗の先見はできない、豫言の適中したのは七分の推理と三分のまぐれ當りである。

危險の中に在つて目的を遂行するものは膽力である、膽力は危險を排除することはあるが無茶な膽力は安全を變じて危險に突き落とすことがある。賤ケ岳における佐久間盛政がそれであつた。

盛政は中川瀨兵衛の背後の營を燒いて奇捷を得た、背面攻擊は精神的に非常な打擊を敵に與へることは蔦果でも前例があつて、甲州の勇を以てしても顧みて敗れた。背面に次ぐのは側面攻擊で、正面から攻めるものは敵以上の優勢をもつてかゝらねば勝利は確保し難いものである。日×戰において僕らは背後の敵を恐れる。

核から細胞へ、細胞から組織へ、組織から有機體へと分析を逆に移して層累相接して緻密な作戰計畫ができる。感情と勇氣とだけでは屹と敗北する時代に入つて高松城水攻めといつた自然を利用した數學的攻擊となり大家族制に立籠る毛利の心死の防戰も城將を見殺しにし

なければならないほど弱いものであつた。

j

僕はこゝに筒井順慶の知己とならう、彼れは一萬の兵を率ゐて洞ケ峠に一萬八千を率ゐる明智の後拒をしてゐたが光秀の敗を見るなり戰はずして逃げ出した、と、それだけでは如何にも卑怯ものゝやうに見えるが彼れは戰機を知つてゐた、會戰には勝敗の決する一點の戰機があつてそれを見るのは名將である。援軍を送つたら敗を轉じて勝とすることのできる時と應援に出かけても味方とともに全滅して戰局を新にする効果がない場合とがある。光秀は戰略家であつて實戰の鬪士ではなかつた、あゝいふ戰には學問より度胸である、光秀の見苦しき敗戰は、側面又は背後から敵を衝くにあらされは大勢を挽回するに足らぬ、味方の背後に備へた豫備軍が參戰しても、たゞ順慶に無効果な犧牲を拂はしめるだけである、後に控へた豫備軍を使つて勝利を占める樣にするには、先づ前軍をもつて敵に猛擊を加へ、敵の少しく退却したのを待つて隊伍を整へて退き、後軍のこれに代つて陣地に就くだけの餘裕を與へねば

ならぬ、さうでなく崩れかゝつた中に新援の兵を加へることは徒らに混亂の度を加へ犧牲を增すに過ぎない。この戰は義戰ではなく順慶は光秀の家臣でもないから光秀に殉じて討死する必要もなく、主將が戰場を遺棄した後の亂麻狀態を承けて、挽回することのできない狀態、戰敗の一點機は洞ケ峠の上から明かに看取された。順慶をして戰に參加せしめなかつた次の理由は明智勢が餘りに早く崩れ立つて援軍を送る機會を與へなかつたためでもあらう順慶の逃げたのは戰鬪力を保全する叡智であつて、たゞの憶病ではなかつたと僕は想ふ。

K

この時代は火藥革命期に入つて武器も變化した、竹中、黑田らの參謀が善き素質を持つ秀吉の腦に、甲越の兵法、孫吳の兵法とちがつた新らしい用兵の知識を注入した。

武器と作戰計畫とは相關々係が密接であつて軍人の甲冑、兵器等の外觀上に變化のあるだけではなくして戰術の概念にまで修正を及ぼしたから戰爭の本來の法則は依然として變らなくとも、それを遂行する手段（たとへば飛行機が發達して築城法も改められたやうに）變革

した。

當時の火藥は現今のそれほど効果的なものではなかつたが、敵を畏怖させる精神的威力は今日以上に偉大なものであつたに違ひない。今日でも巨彈が一秒千五百フヰートの速力で唸りを立てゝ飛び、敵の頭上に炸裂する時に味方の士氣は大に振ふものである。重爆彈を載せた飛行機が味方の頭上を飛んだ時には亢奮し切つた勇士の頭上から冷水三斗を浴せかけるものである。

無學の大將は秀吉を推すが、秀吉ばかりではなく、戰國時代に堀起した名將である賴朝、義仲のやうな、境遇上から學問をする機會を持たなかつた人が天下が覇を爭ふことが甚だ多い。博學多才なもの——たとへば大江廣元のやうな——が却つてその帷幕に使はれてゐる奇現象は決して奇でも妙でもない。**現代の戰爭でも將帥は必らずしも末梢的學問を要しない。**兵學家は必らずしも名將でないごとく、猿面郎、木曾冠者も軍人としては全く素人であつた。好んで戰ふ場合もあれば、又た勝味なくしても絶望の戰を迫られる時もある。戰爭を避ける心は戰爭に負けることで、敵は直ちに追擊戰に移るであらうから負けると知つても抵抗す

ることが敵に損害を與へるだけでも逃げるより得な場合がある。追ふものと追はれるものとの勇氣は非常な相違であつて、神子田長門が逃げる時に後を振向かなかつたといつて勇士の中に數へられた、後に氣を取られて振向かずにゐられないのは卑怯ものである。

熊谷に追跡された敦盛は、すでに鬪志を失つてゐるから戰はずして、すでに結果は明かである。敦盛は遙かに赤旗を樹てた味方の船を沖合に眺めることによつて逃げる目標があつた從つて捨身の勇を缺いだから、たとひ劍術に秀でゝゐても負けたであらう。米國は熊谷の勇があつても僕らは逃げるあてはない。この國、この島、こゝを逃げて何處へ行くのだ。

L

敵の中心主體である總帥を斃しただけで昔の戰局は終つたもので甲越合戰では機山と不識庵とがその目標であつたが、現代は國民戰であるから一個の將帥だけが戰爭の生命ではない國民が擧つて參加するやうになつて戰爭の中核は氣體化した。軍需品工場に働く者も戰鬪員なら軍事公債に應ずるものも間接の戰士であり新聞記者、宗教家、教育家までが戰爭を支持

するから、どこからどこまでが戰鬪員であるかの限界が付かなくなつた、支那のやうに無師腑の國は特に急所といふものがない、南京か、廣東か、洛陽か、鄭州か、北平か、どこが心臟で血液の中心を成してゐるのが、どこも皆手足のやうだ。

戰術がどんな周到な計畫の上に立つてゐるにもせよ、戰爭には豫期せられない出來事を伴ふ。一方が敵狀を手に取るやうに知悉してゐるとしても、他方が推測を誤らせるやうな手段を講じてゐたがために、理づめの研究を基としても組立てられた作戰でも、負けは的外れにより勝利は僥倖によることがある。國際聯盟が成立してから、戰爭の定義が急に不分明になつてきた戰爭の存在又は發生過程といふものと自衛權の行使とは說明の仕方によつては混沌たるものになる、說明によつては世界の半數以上は今鬪ひつゝあるといふこともできる。

M

米國人が邪推してゐるやうに日本のスパイ網が合衆國から南米、カナダに亘つて周密に張り廻はされてゐることを事實としても、スパイにどんな誤りがないとも限らず又た彼らが

自分の功名を誇るために故意に情報を誇張し又は揑造して本部を誤らせる事がないとはいへない。實際の戰爭において「意外」に出逢ふこと多い、豫期せざる突發事變が恐ろしいやうでは戰爭を始られるものではない。歐洲戰でドイツの豫期してゐたバクテリアの脅威が來らずして、想像外であつたタンゲが怪物のやうに現はれたのもそれであつた。從つて必勝を叫ぶのは背後の國民を力づけるに止つて戰爭には必然的勝利を豫言せられるものではない、負けた時の處置を考慮しながら進んだといふ故山縣元帥のやうな冷靜な名將は珍らしいといはれる。

日本の國是の中で、これは絕對に外交手段で解決すべきもの、これは止むことを得ない場合には戰爭に求むべきものとの大仕譯けをしやうにも區別のできないほど複雜なものがある支那、ソビエートのやうな妙な社會組織を有する國家と隣合つたことが災禍であり、さらに米國を後に控へたことが困難を增して、外交手段で濟ませられるものでも、やゝもすれば嗤嘲にならねばならぬこともある。

N

日本は大自然から惠まれない繼子ではあるが東洋においては立派な嬌男である、たゞ勤勉が日本の生命であつて、その外に何の取りどころもない。常には梅雨に腐つたやうな陰鬱な顏をしてゐるが一たび戰爭となつたら晴天の下に大手を擴げる熱帶植物の輝を放つ。人も馬も石でさへも感激する、戰場で愛兒が死んでも親は泣かない、全土に涙なく、古い國が新らしく亢奮に若返る。

戰爭に對する日本人の意氣は、地震でやられた時とは全く違ふ、地震に弱くとも戰爭には強い、日本人は戰爭と何かの因緣がある、他人ではない。

過去の出來事以上の關心事をもつて未來を見透さねばならぬ。開國から五大强國の列に入つた今日まで日本の國運は軍人の力によつて推進された、內政、實業なども日本の進展に就いて重要な役割を演じてゐるが獨り外交が退嬰してゐる。軍人は日本を利し外交官は日本に損をさせてゐる、外交官が國際交涉に出かけたら空手で歸つてくるか又は國威に疵をつ

けて歸つてくるが、軍人は必らず何か氣の利いた手土產を提げて歸つてくるから外交官の歸つた時は國民が怨嗟に滿ちて、軍人の凱旋のやうな歡迎ぶりはできないのである。

軍人の努力した成果が、いつも外交官によつて毀損されるから國民が軍人に對するのと外交官に對するのと信任の程度に非常の差がある、外交官が國際問題で眞空的發言をすれば後難が日本國民にふりかゝる。

平時ならそれでもいゝとして國際關係が變態となつた今日に、ダンスと語學の上手なことを除いて何の見込もない、氣慨もない、安全第一主義の下に小才を働かせる外交官に凭れて無理に感情を弱く持つてゐられるものではない、日本人は結束して龜裂しかけた日本主義に補强工事を施さねばならぬ。

O

黃色人は、いくら氣張つても白人に何の脅威を與へるものではないと安神してゐたのは今から十年以前であつた、白人自身が「我々は沒落しつゝあるのではないか」と感じ始めたの

は昨今である。

有色人は西洋文明に適應し得られるか否かの問題は日本においてその回答を得た。いま支那がその問題を課せられつゝある。東洋の別家である印度、蘭領東印度、フヰリツピンはつゞいて答案を提出するであらう。答案を書くのが面倒ならそんなものを引破つて實力實質で答へるがいゝ。

世界三分二の人口を有つ吾等のアジアに、君等白人は少數の存在ではないが、何分の一、何千分一の存在か、それを意識したら自分ら少數の利害のために、さう勝手に振舞ふことは遠慮すべきである、**アジアの治安を乱すものよ、去つてくれ。**

P

白人跳梁の一九〇〇年——三二年

白人淩落の一九三三年——四〇年

アジアは白人の支配に向つて吊鐘を撞かう。白人の專横四世紀、餘りに長い不人道であつ

た。その反動として當然に禍ひの時代が來た。海の向ふの薄汚ない國民と賤視された吾らの邦にも黎明の春はくる、同時に地球の他の半球には夕暗が訪づれるであらう。

Q

白人は支那の排日問題に對してどう向背を決するつもりであるか、支那に味方することは資本主義の自己否定であり、日本に味方することは支那の民族運動を認めない結果に陥るものと彼らは思ふであらう。白人たちはこの問題に關して、はつきりとした斷案が無いやうであるが、彼らは國際聯盟によつて日本を抑へ、それを世界の輿論といふ。日本が反抗すれば世界輿論の前に日本は重大な責任を負へといふ。

そんな勝手な難題よりも、日本人それ自身が今むづかしい問題に出逢つてゐる。白人に組みして搾取仲間に加入するが、支那に味方して搾取連中を大陸から追つ拂ふかである、**この舵の取り方によつて日本の動向に一大變化を來すであらう。**

R

國外の迫力は強く個々の人に向つて感じる時代となつた、それは列國が國内で革命騒動を演じるより國内を結束して對外戰に一致せしめる方が有利であると計算したからである。

陸軍だけでも武裝するに大きな費用を要する。その上に海軍、その上に又た空軍、日本はこの三つの中のどれを缺くこともできないやうに敵前に露出してゐる。從つて戰爭に最後の勝を占めやうとすれば三方面に渉つて遺憾なき準備と軍資の蓄積とを要する。

科學と機械とが主となり、肉彈と勇氣とは第二義に落ち、金が肉より力ありとする物質至上感念からみれば日本は×××の敵ではないと、×國人がさう觀るのは成金人として無理のないところである。

戰爭は黄金の投げ合であり、戰爭をやり切るものは、たゞ富國のみである。勝利は金で買へる。彼れは機械と金との威力をもつて全世界の委任統治を行ふべき時機が、近き將來にくるであらうとの自惚れも、他國からみれば世界の委任統治よりも自國内部腐蝕の方が早く進

行するやうに思はれるが、本人に取つては元來が誇大狂であるだけに實現すべき豫想と思ひ込んでゐるらしい。

次いで來るべき戰爭が物資的にのみ依存して戰爭の要素である精神、氣魄を加算することができないとすれば物資的統計において劣勢な日本は必然的に敗北の結論に到達するであらうから米國の勘定は簿記的には誤つてはゐない。

S

英國は米國の勃興を忌みかつ怖れた、歐洲諸國を誘うて米國を押へつけやうとして國際聯盟を企てたが、英國よりも有力に聯盟を利用したものがあつて聯盟はフランスの手に丸められてしまつてフランスは英國の友邦ではなくなつた。英國は例の傳統的外交によつて他の諸國を誘うたが、英國のために米國の矢表に立つやうな馬鹿ものは歐洲に存在しなかつた。なぜならば米國の前では英國が餘りに落ちぶれ方が甚しいからである。名譽の孤立を誇つた氣魄が消散してゐる英國は歐洲諸國の離反してゐるのをみて、飜然として自ら米國の前に跪

拜した。英國を自分の掌中に容れた米國は、長き手が更に長くなつて、その猿臂は十分に日本を越えて支那にとどくやうになつた。米國共和黨の親支策は計畫的に日米戰爭の前提となりつゝある。

世界の爭覇戰といつても世界人の全體が參加してゐるわけでない。少數の野心ある國家の間にだけ火の出るやうな摩擦が行はれて、他の多數國家はその飛沫を受けて迷惑してゐるに過ぎない。たゞ僅かの國家、くわしくいへば米、英、佛、伊、露と、たつた是れだけが全部である、五本の指で數へられる少數の爭ひのために世界人は血の沐浴を強いられてゐる、特にアジアにはその中の一國すらもないのである。

特に米國の一段高い頭角は他の四國を焦慮させ、世界を再分割に向ふ速度を急き立てゝゐるが、この五つの中で大小强弱はあつても、どれもまだ完全に世界を征服するだけの力はない。それを得んがために個々の國家を本位として他國を突き落さうとしてゐるばかりで世界的な汎人類的な大規模の政策を建てゝゐるものがない。たゞ何がなしに爭つて、どこからともなく壓力が加はつて戰場へと押し出されつゝある。

平和主義者は一種の陰謀家であつて危險な存在である、日本が時局に慨して決然として起つた時には、國内の觀念論者は强力實行の前に妥はない、どこへ行つたのだ？

米國の平和論者、英國の勞働組合は聯盟規約による經濟封鎖（第十六條）を叫んでゐるが、アングロサクソンを戰爭に卷き込む最善の毛布であらう。被封鎖國の苦惱が封鎖國にどんなに反射するものであらうか、廣角度の視野から眺めたらその無謀に驚くであらう、現に歐洲の眞中でドイツが倒れつゝある、それに對して列國は手を引いて立つてもらはねば世界經濟の一環が千切れ去つて困つてゐるではないか。

T

米國の考へてゐることを代つて云つてみやうか……

日本は支那に勝つた、ロシアにも勝つた、併し日本の戰つたものは相手が貧弱で、ほんの小さい局地戰に過ぎない、米國を相手にしたら勝手がちがふことを知つてゐるか。

歐洲大戰でドイツが海岸から英國を空襲したことの記憶があらう。日米戰爭では、日本は

英國より的確な標的だ、ハワイ、ミッドウエー、アラスカはいゝ足場である、米國は戰爭の用意がある、と、これだ。

日本は土をつかみ、水を攪んでゐるが、米國は空をつかんでゐるのだ。空軍であつて空論ではない、實際的だから日本は氣の毒なものだと附加へるであらう。世界一の飛行船は米國人の高慢を乘せて上昇した。星を嘆美しながら深夜に歩いて河へ落つこちた何とかいふ人のことを思ひ出させる。

U

米國機の積んでくる一千キロの爆彈は、マッチ箱のやうな日本家屋の上にどんな兇暴を逞しうするであらうか、航續能力から推せば日本は完全に米國機の活動範圍に包括せられることになる。

現代の戰爭は平時に使用されない過剩の工場と原料と勞働豫備隊が後方に控へてゐなければ第一線に立つ軍人は有機的に働くことはできない。日本の造機能力は平時においては辛う

じて需用を充たせるが非常時に殘された製造餘力は甚だ少い上に、地形は攻めるに便利であるが守ることは數百マイルの外に防禦線が張らねばならぬから線が擴大せられて守力は稀薄になる。

戰爭の原因は、どちらから始めたのであるとか、どちらが不正であるとかいふ泥をかけ合つても始まらない、外交生活をしたものは卒直にいへないやうに舌が曲つてゐるが、米國は一直線に上海事件をもつて日本の責任であると高唱してゐる。

日本が滿蒙を强壓したといふが、メキシコに向つて、ハイチに對して米國が强制したものよりは筋が通つてゐる、南京條約は支那搾取法についての英國の創作であつた。

米國は支那の土地を掠奪する代りに、支那の空と心とを奪つた、空といふのは航空權であり、心とは宗教侵略である。米國が毎年一千五百萬ドルの巨費を支那の布教費に充てゝ三百萬の信徒を神の名において米國に歸依せしめた。米人は米國優越感念を高く双手にさし揚げて自ら救世主をもつて誇つてゐる、布教組織は周密に計畫され支那人の頭を隷屬化させるため極めて巧妙に運用されてゐる。

米國は支那に對して親切なつもりか、不親切の心を持つて臨んでゐるのか、その眞意は米國人自身にもわからないであらうと思ふ、支那に親切をすれば支那がそれを惡用して排他の材料とする。圖に乘せるだけ乘せて、降りる術を敎へてやらねば支那が可愛想ではないか。米國は一たい支那をどうしてやらうといふのだ。支那のために日本と戰うだけの決心がなくして親支反日政策をもつて場外の熱狂者を喜ばせてゐるだけなら支那を援助する精神に逆行するものである。

南支に重大な利害を有する英國も日本の進出についての防禦を堅固にした。香港が打てば響く金屬製の要塞となり、シンガポールと呼應して軍艦、飛行機、望樓、印度兵、砲台、船渠といふ完備した殺人手段の規模を大きくした、それでも尙ほ英國は絶えざる恐怖を抱いてゐる。日英同盟があつた時分の安泰な氣分を想ひ起すことであらう、東洋で日本を敵としてどんな結果をもうけるであらう。金城でも鐵壁でも戰爭となつたら何處に行つても安全地帶があるものではない。

その六　財閥と戰爭との關係

A

米國の財界は二十五人の會社重役に支配せられてゐるが、日本は三つの財閥のその番頭によつて經濟を振り廻はされてゐる。と、書き出したら僕は共產風を吹かすやうだが、帝國主義國家の成員となりながら支配階級の跳梁を制止しやうたつて、それの無理なことはよく知つてゐる。僕らは治維法による××の××を××してはならない以上は寡頭大番頭の後に追隨して、こぼして行く分け前を拾ひつゝ國民大衆とゝもに進んで行かねばなるまい。

日本の金藏を支配するものは資本集中による銀行の動力で、それから糸をたぐつて政治の中樞神經に喰ひ入らうといふやうな野望はなくとも、彼等は大きな仕事をする限りそこまで知らず〳〵こゝへ進んできたものであらう、なせならば營利の大きな粒はそんな怪しいとこ

ろに轉がつてゐるからである。

民主主義は多數的意識の上に立つがゆゑに民衆の意旨を尊重せねばならぬから幹部といはれる專制勢力の存在餘地は狹められたはずであるが、事實はその反對であるやうに、金融資本にも鋭い巾着切り智惠と貧乏人を蹴ぎ倒して平然たる慘酷な度胸をもつた番頭の指揮を必要とする。

B

どんな政黨が内閣を組織しても政治的にも經濟的にも多量の社會施設を政綱政策の中に織込まねば民衆の支持を得られない、昔の帝王でも獨裁政治家でも善政といはれるものは民意尊重——特に貧困者に對する同情を政治に反映せしめ決して無條件で資本主義を擁護しなかつたものであつた。しかるに今日の寡頭番頭は何の幸ひか社會民衆特に貧困者の意思、境遇を考慮することなく營利一直線に走つても法×、×德、×××、×××などの十分な保障を受けてゐる。こんな資本主義財閥に取つて×××たい時代は昔から絶無であつた。政黨の御

用金を貰いだり申譯けだけの慈善を行つたくらゐでは貧借は平均しないであらう。

社會主義だつて理想論では矛盾は少いが實行に取りかゝつたら矛盾はいくらでもある、矛盾の毛を一本づゝ拔いて行つたら豚は丸裸になつて風邪を引く、矛盾は一種の保溫材料である。

僕は社會から矛盾を一掃したいと思ふやうな潔癖家を嫌ふ。僕は資本主義を殺したくないため富者の讓歩によつて下層階級の飢餓を克服したいと思ふ。現在の國家構成の下においても、その範圍内で講ぜらるべき方法はいくらもある。今日の慢性恐慌は資本主義破滅の時期に入つたものではなくして貨幣制度を運用する方法を誤つた一時的の發熱に過ぎないものと僕は打診する。番頭たるものは地盤を固めることなくして財閥をして最高階段に登らしめてはならない、そこは危いところである。

僕らは生活の安定を國家の××××に求めないで資本主義的混雜の中を泳いで行かうとするのだから鉢魚のやうに硝子瓶を番頭さんに振り廻はされて、鼻を撲つまいと身をかはすことに忙しいのである。インフレーションでは勞働者、俸給生活者に伍して低い生活水準の

も一つ思ひ切つた低下を強いられ、中產階級なら營々辛苦の預金の何割かを沒收される。デフレーションなら失業と生活苦とに挾まれて勤儉の餘地のない勤儉を強制される。インでもデフでも水の動搖するたびに錦魚は疲れる。餘り上下させてゐると貨幣がその信用を失つて資本主義は外廓から崩れ始める、こゝらで資本主義の攻撃を始めたら溜飲を下げて痛快がる人も觀者の中にあるかも知れないが、僕はその仲間に這入り切らないで意氣地なくも番頭さんの末尾に付かうとする資本主義下の善良な市民である。

C

貧乏人は財閥を攻撃する資格はない、なぜならば大富豪を造りあげたものな大貧乏人であつたからである。**貧乏人が自分たちの所有物——貨財、勞働力、購買力——を馬鹿々々しい値段で賣つてしまつたから今では何一つ殘つてゐないのである。**相對づくの取引であつたから法律上では、突つかゝつて行くべき權利は何もない。

二百圓のサラリーマンまで出世したら上出來である、別莊の番人として活きて行つても仕

方がない、職業に貴賤なしとは、彼奴！　うまく云ひやがつたものだ、そんなことをいつて阿呆をたらし使ひにするのだ。でも辛抱しろ、といつても共產主義的に總ての人が總ての事に平等に携はるといつた出來ない相談を持出すものではない、犬の群にも強い奴と尾を垂れてゐるやつとがある。強い奴を暗殺する弱い奴は底のない意氣地なしだ。

猿まはしの猿になつたとあきらめろ、繫がれた紐の伸縮によつて上手に藝當を演じてみやうではないか？　面白いよ。

D

財閥といふ新らしい經濟力は戰勝を經るごとに幾何級數式に增大する、戰勝は彼らに取つて「商業化した特殊の形式」ともいへる。××の給與は無慘に薄いもので人間の耐へられる極度の困苦を強いられる、ナポレオン戰爭、南北アメリカ戰、普佛戰、日淸、日露戰、歐洲大戰、そんなもので何人死んで何人不具になつたか、そんな氣の毒な人達の外に超然として死ぬ氣づかひなしに莫大な黃金を獲得し得る×××の×××がある。

平時においてはファショ頭の持主が並等で、財閥を攻撃する無産頭が優等品のやうに青年たちに思はせるが、國家に事變が起つた時には、ファッショに轉換する頭が特製上等品とせられる。戰爭狀態となればプロレタリヤから攻擊の××を避けて×××はちよつとの休養時間と火事場稼ぎの時間とを得られる。下層民の零細な郵便貯金が軍事公債に振向けられたり滿蒙、上海事變でさへも下層者の慰問金が集つて千萬圓に上つたが富豪たちは殆んど金を出さなかつた。

E

世の中に活動してゐるものは正體と假體との兩面を持つてゐる。無產黨でさへ上海事變といつた國際的爆發性のものを前へ持ち出された時には、氣の利いたものは支那大衆に同情するとゝもに日本の權益を主張する、氣の利かないものは默つてゐるか又は××に××される。これは英國でも米國でも同じことで平時の赤色が首鼠兩端の鼠色となつて逆襷をこぐ。――もちろん陰では何かの動きはあるやうだが――。社會立法案を持出せばブルジョアジーは嫌

な顏をしながら正面からは反對しない――陰では何だか策動してゐるやうだが――。下積になつてゐるものは割合に正直だが社會的に勢力のあるものは水陸兩棲であつて、贊成でもあり反對でもあり中立でもあるから水陸空の三棲でもある。潔癖なものは眞僞ができない保身術を知つてゐる、ゆゑに潔癖なものは社會に立てない。

戰時には賃銀が騰つて勞銀者も利益を享けることはあるが、それはいふに足らぬ。企業家も儲けることはあるが一種の冒險であるから損をすることもある。ひとり金融資本家はそんな冒險を必要としないし又た冒險をやつても恐慌となれば國家經濟界安定のためといふ好辭令の下に國民の租稅で救濟されることがある、たまに慈善行爲もやつてみるが、それは惡魔蹟上の笑劇の一點に過ぎない。

こんな制度は人間が深い考慮を拂つて築き上げたものではない、もし人類が計畫的にこんなものを造つたものとせば餘りに無茶な組織である、どちらにしてもこの形勢は進行を續けてゐる、どこまで進行するか、たゞ今のところ無見當である。

無産者が百圓の金を稼ぎ出すのと富豪が同額の金をもうけるのと、その勤勞の難易は比較にならぬ。一方の百圓と大富豪の百萬とは同じ程度、或は千萬圓とも匹敵するかも知れない。同じ利得でもストーブもなく煖風器もない小賣店が寒の北風に吹きさらされたり夏の土用の夕陽に照らされながら朝の五時から晩の十二時まで休まないで刻苦して得たものと。スチームの通つたオフキースで寒さ知らず、氷柱の立つてゐる洋室の暑さ知らずの中に、平日は六時間ばかり、土曜は半休で、日曜を休んで、月曜の午前は怠業狀態で得た利益とは勤勞原價は同一でない。山村海島で小作、漁撈、樵伐で無産者がいくら働いても一生に千圓を殘すことは不可能とされる、その千圓は東京とか大阪とかで働く十萬圓にも相當するであらう、大阪東京で十萬圓を稼ぐだけの勞苦を覺悟したら、同じ苦勞でニューヨークならば百萬圓と一桁を上げたであらう。

三菱の資產はいくらあるかは知らないが假りに長者番附通りの五億とする、もし岩崎が米

國にゐたら五十億の富を持つてゐたであらうと思ふ。この點において岩崎が米國に生れないで日本に生れたのを氣の毒に思ふ。地所を丸の内を所有しないでマンハッタンの全部を持つてゐるかも知れない、丸の内の坪當りの地價とマンハッタンのそれとの差違は日本の三菱合資と米國の三菱合資との財產測定の尺度ともならう。麻布島井坂は僕が用事があつてよく通るところだが、彼の邸の前を通つて自動車の窓を越して高い門標を見あげた時にはそんな感じが起るが、彼れを呪ふ氣分は不思議は起らない。

三井だつてその通り、日本に居ればこそ大財閥だとか、政友會との腐れ緣だとか、ドル買ひだとか罵倒されるが、米國にゐたらもつと金持ちになり、もつと贅澤をしても日本のやうなけちな攻擊を受けなかつたであらう。

贅澤は怨嗟の的となるが他の一面では文明を推進する。新らしい發明、新らしい企業は贅澤の報酬を得んがために企てられることが多い。暴利の誘惑は名譽の感激とともに個人の計畫活動を刺戟する、浪費のないところに文化はなく下層民を霑はさない。公共社會經濟組織は暴利、浪費、贅澤を抑へるが、文化の進路を閉塞する。ゆゑに富豪は公共事業に金を出

すことが第一で、それがいやなら贅澤と浪費とによつて金を下層に分散せしめることの義務がある、富豪の勤儉節約は利己の甚しきものである。プロレタリアはブルジョアの贅澤を攻撃するより寧ろそれを奬勵するがいゝのだ。

三井岩崎が日本に生れたのを僕は氣の毒だといつた、併し物は思ひ樣だ。もし彼らがロシアにゐたらあの手でハンマーを握らされて牛隊、馬隊に伍して人隊の中で强制勞働をやつてゐるかも知れない。英國にゐたら所得稅と相續稅とで資產の半分は崩されてゐたであらう。日本にゐたから維新の國內戰から明治十年の西南戰、日淸、日露、日獨、滿蒙上海事變と、一階段を經過するごとにMにしても、も一つのMにしても、Sにしても國家は强盛になりそれとともに財力も太つた。戰爭のもうけは何はさて置いても財閥のもうけであるから日本が負けてゐたら無產大衆が反對にもうけてゐるかも知れない、無產大衆のもうけといふのは×を××××ではなく無形のある物××××を指すのである。そこを考へたら彼らはいゝ時代にいゝ運命を持つていゝ國に生れたものといへる。だから無產者は彼らに奉仕を××し、××を××する××があるかも知れない。

G

財閥を憎みながら中產階級は虎の子を財閥の銀行に預けるのは他の銀行よりも財閥の番頭さんを信用するからである。財閥の生命火災保險へ契約するのも宣傳からくる信用に眩惑されたのである。貨物は財閥の倉庫會社へ預けるのは擔保として貸してもらへる便利があるからである。信託預金もする。財閥が過半數を占めた殘りの株式を分けてもらつて株主の末班に加へてもらつても何の權利もないのである。財閥の企業會社のつくつた製品を買ふのは大量生產で安いからである、營々として蟻のやうに金を盛り土を盛る。金を盛ることのできないものでも子弟に學資を入れてサラリーマンとし土を盛る手傳ひ人となる。それもできないものは財閥の建てた軍需品工場で働く、小さな工場で働くよりは政府の補助のある財閥工場で勞働する方が待遇がいゝからである。かやうにして國內で搾取する——財閥が搾取するといふよりも周圍から寄つてたかつて搾取してもらふ。被搾取志願者の幾萬が一つの財閥を圍んで働き蜂となる——。國內で餘つた搾取力が海外へ溢れ戰爭の基礎をつくり、戰爭となつ

たら×××が眞先に××せねばならぬ、皆さん！　殊勝な心がけである。

H

戰爭の原因が貿易競爭から出るものとせば、多くの悲慘な記錄を殘した戰爭も支配階級のために戰つたものといへないことはない。そんなつもりで戰つたのではないにしても結果がさうした現象を呈するのだから仕方がない。日本の財閥は遠慮深く米國のそれほど惡性ではないから財閥が戰爭を挑撥したとはいへないが、戰爭によつて財閥の活躍範圍を擴大し、歐洲戰爭のやうな大規模のものでも××××の排他力による奇術であつたと聞かされたら墨壺で命を投げ出して働いた×××は驚いて腰を拔かすかも知れないが、國際經濟の潮流を冷視した理智のある人ならそれ以外の觀察は××××はずである。

現在の所有制度を再吟味することなしに、資本主義をそのまゝ謳歌せしめることは御用學者によつて、所有感念で脅かされてゐる階級に對する貪婪遂行の辯護にしかならない。現代の××××を擁護する經濟法則が相當に慘酷なものであることは橋の下に臥てゐるルンペンを搖り起して聽かなくとも誰れにても理解できることである。米國が年額二十五億の慈善金を投ずるそのうちの五分一は富豪の寄附である、彼らは搾取で頭を殴り、慈善で頭を撫でる日本の××はそれさへもしない。

I

財閥の慾の深さに愛憎をつかして今度できた新滿蒙自由國での企業は財閥を除外して株式組織の會社を設け政府の補助と監督との下に統制を圖らうとする企てもあるが、政府の聲のかゝつたものは完全に發達しない。半官半民も滿鐵で懲りたことで役人の臭ひがすれば政黨が潜入する、その上に能率が擧らないで經費が嵩む、その結果は總括的に國民の負擔となるからそれより財閥の方がいゝかも知れない。

東拓でも滿鐵でも總裁の任期は五ケ年だが、政黨の都合で永くて三年短くて六ケ月の椅子である。これでは政府からいくら補助してもらつても成績は駄目だ。僕の記憶するところでは任期を完了したものは僅かに一人あつた切りである。新に滿蒙に事業を起しても、あの調

子でやられては國民は迷惑する。

滿蒙には日本の利權が經濟的理由で確保されねばならぬことといふまでもないが、あんな大仕掛けな匪賊の大清潔法を行つたあとが又た財閥に獨占利益を提供して大衆がその恩惠に均霑しないのは不條理だといふ聲に二つのMも一つのSも遠慮して手を出さない。するとどうだ、滿蒙を大掃除したあとの建設を誰が始めるかといふに誰もない。却つて無資力の鮮人が水田經營に出かけて前哨となるぐらゐであつて、この點においては内地大衆は役に立たないといふのは中途半端の文化人となつて生活が向上してゐるからである。滿洲ゴロ、支那浪人などが蟻のやうに走り廻つても害になつて益にならないといふわけは彼らはチヤパン製馬賊なのである。で、政府も民衆も骨折つて掃除した坐敷へ大財閥の出席を乞はねばならない。そんな機運を見計つて財閥は嫁や〳〵ながら國家のためなら致方がないといつた表情で出掛けて奉仕だと宣傳しながら××××をする。

資本家だけなら、どんなに滿蒙であばれても恐ろしいものではないが、それに動力が附隨すると恐ろしいものになる、財閥が滿洲へ乘り出したら動力製品に低貨銀を結付けて内地工業を威嚇するであらうし、さらにロシアに對抗する食料品、支那に對する紡績織布、他の列國に對する石炭、鐵、大豆、肥料といつた國際商品が動き出して紛爭の種となるであらう。大農場には電氣農具が唸る、それが内地の農夫を威迫しないでは濟むまい。大きな製粉工場毛織工場等、總ての企業が擴大されて關税の擁護のない限り内地工業はこれに對抗することはできまい、財閥の資本の進むにつれて國防戰線も進めねばならぬ。

滿蒙にレバブリツタ・オブ・グレート・マンチユリアの標識が建てられ、日本の支持によつて樂土化するにつれて日、支、露の外の各國から集つてきて混合民族ができる。一と口に日支露といつても日本人には内地人と鮮人とがあり、ロシアには赤白二民族があり、支那には滿、漢、回、藏、蒙があり、利害も風習も違つたものが各地に集團をするであらうし、米國は金をもつてドイツは機械をもつて英も鐵道關係をもつて割込むであらうし、佛、伊も進出するであらうから財閥が風の種を蒔いたら國際は嵐を持込んで、滿蒙の大平原を背景とし

た戰爭、戰爭を背景とした經濟爭鬪、利權爭奪、その後に來るものは米國の金融的占領であらう、滿蒙自由國は國際關係を複雜にし、日本もこれからます〳〵多事になる。

K

世界を歩いたら到るところに凱旋門がある、ガイドはそれを仰いで昔の武勳を旅客に誇る文化の高い都市ほどそんな目さわりのものが多い。日本にも軍服を着た銅像があるではないかといふものもあらうが、日本は平たく尙武國だと打出してゐるからそれでパスすることはできるが白人國ではさうは行かない。彼らの精神的背景はクリストの敎義であり、博愛であり、平和であり、隣人愛であつて侵略主義でも拜金主義でもないのに、どうしてこんな言行不一致の下に結束してゐられるかと探求してみれば、その以前には種族を同じうしたのが原因で集つたのもあらうが、近世においては經濟上の利害の爲に都市集中となつたのである。現在では經濟關係の外に防禦と攻擊とにおいて同意する市民の共同戰線を形づくるための集團となつてゐるのであるから戰爭を始めたら有利だと信じたら何時でも平和條約から自衛權

を抽出して絕對的に無理な主張をするであらう。

オランダ、スペインでもその通りであつたが今では生氣が拔けて外形だけが殘つてゐるに過ぎないに反して、バルカン半島は小さいながら睨み合つてゐる。これなんかは可愛ゆい摩擦に過ぎないから世界的に火を發する危險は少いが、富有搾取地域を多く持つてゐる國ほど戰爭の長き歷史を持つてゐる。

兒童から青年、青年から老人に到る一貫した生活を走る長い線路には祖先の武勳禮讚心理が並木のやうに植ゑられてゐる、あの軍服を着て勳章かけた銅像の人の生きてゐた時代の働きが歷史に載つて少年の腦髓を强く着色した。

文化を誇る白人國の今日の繁盛は過去の侵略行爲が齎らした遺產である、どんな國でも現在占有した通商路は血の代償でないものはない、なぜかとならば通商路が一線でありこれを求めるものが二國以上であつたならば——妥協による均等に出づる外は——强い方が分捕るのである。たとひ一時的に妥協して共有になつても双方とも排他心が强いから結局は强者の手に移らねばならぬ。どちらが專有するかは戰爭の結果であり、戰爭以外に明かな裁きは望

まれない。

そんなことをして得た血の通商路は何人に與へるかといへば資本主義國家であらば××に與へられる。中小資本家の手では受け切れない大物であるから、たゞ大財閥のもうけの臭ひを嗅いで滿足する外に方法がない。財閥が無理に國家から奪つたものではなくして自然に轉げ込んでくる暴利である。かやうに國民は財閥に奉仕したが財閥はどんなサービスをしたかといへば軍事費に向つて多額の負擔をしたといふ辯疏は、その金はどうして得たかといふ反駁に對して尾を出すことになるであらう。

L

滿蒙には原料がある、消費もある、消費から迫求して生産に到り原料に遡つてくる時はスタートは資本投下に歸する。生産品から原料と製造費と運賃（保險料、研究費等）を引き去つたあとの剩餘は資本投下者と勞働者との利潤に歸屬すべきものであるが、資本家には企業の危險料を引受けねばならぬ外に貨幣の中間介在によつて勞資の公平な分配を決定すること

とは極めて面倒な仕組みになつてゐるから、資本家が勞働者の當然の利得を呑んでしまふことは傳統的であり合法的なものと認められる。しかるにこゝに勞働者をして權利を主張せしめることを憚る新らしい力が出現した、それはストライキ破りの動力である。資本家は云ふであらう勞働者が儲けさせたのではない、勞働者より厚く、そして動勉である動力がもうけさせたのであると。

人間は職業によつて損をするものと得をするものとがある、懐手してゐて利益が入つてくるものと一生を働き蜂に終るものと、みなこれ運命である。

如何ともすべからざる運命に反抗して跪いても、もがき損である。共産國家に在つても幹部と下積み黨員との間は雲壤である。同じく大臣になつても三種ある、刑務所へ引かれて有罪になつたものと、證據不十分で青天白日とは行かなくとも暗天曇日ぐらゐで前科付きを逃れたものと、同僚が未決にゐても世間體を憚つて辨當の差入れを遠慮してゐるものとの天地人である。他人の幸運を呪詛するより自分で自分の樂境を開拓することが間違ひのない幸福である、と、さて、僕は何を書くつもりだつたか、さうだつた、財閥の番頭禮讃だ、本論

に立戻る。

M

鎖國制度の割れた殼から、これまでに存在しなかつたところの、サムラヒに代る職業的軍人――國際會議ではエキスパートといはれたもの――と、ミステリーに代る海外商戰人――商業史ではアドヴエンチユラースといはるゝもの――とが飛び出した。軍人の後には商人、商人の後には軍艦が迫陸して、商人は國益を增進するものとして、軍人は國威を發揚するものとして、商人が本國へ運んだ外國財が租稅となり軍事費となり軍人を擁し出した。商人といつてもその名の示すやうにアドヴエンチユラースの無茶ものであるがゆゑに向う見ずに商陣を遠征せしめる。それを擁護するため廣範圍の防衛を要するが、軍人によつて爲された防衛は消極的から積極的攻勢に轉ずるを原則とする、國際競爭の霰彈の前に勇敢に身を暴露して到るところに有形無形の衝突も遭遇戰も行はれた。

それから今までに何度も平和危險（恐慌）と實際戰とが行はれたが、その度ごとに破產者

と戰死者とが續出した。

日本が今日のやうな變化を來たしたのは科學の進歩でも人文の發達のためでもない、そんなものは附隨物であつて蓄い小日本を十年ごとに大きくしたのは、ちよつと云ひにくいことではあるが、戰爭のためではなかつたか。

N

戰爭は勝つても負けても××××ぬといふのは嘘である、道德家はわざとそんな嘘をいふが大成金、新興國は財產目錄の桁を高めたり地圖の色を擴げたりする。

僕は日本が國を富ますためといつた不純な動機から戰爭をしたとは云はないが、餘儀なき戰爭が偶然に日本を利益させたものといふ。日本の主たる目的は害を除くに在つた。害を除きつゝ滿鐵線に沿うて北進してゐるうちに偶然にも滿蒙に新國家が現はれた、交通、關稅、財政、金融、國防、郵便、貨幣等に整理の手が着けられてゐないから、まだバラツク式ではあるが虐政だけは廢除せられた安住の確立した國家ができ上つた、それが日本と滿洲國の大

衆を、どんなに益するかは將來に殘された問題ではあるが、前途は必らずしも兩國に不利ではあるまいと思はれる。

戰爭が採算に合はない社會活動であつたら昔から今まで歷史的に繼續的に、狂氣のやうになつて非戰鬪員までが聲援するはずはない、聲援しないものは平和主義者であるが、同じ平和主義者といつても骨の髓から戰爭嫌ひのものがあり、憶病によるものがあり、正義觀念を誤つてゐるものもあり、又た道德家の假面をかぶつてゐるが、一朝戰機が熟すと見れば主戰論者に早變りする利巧ものもある。米國の平和論者は——宣教師をその中に包括して——後者に屬する。

どんな社會變動でも萬人が皆損をすることのないやうに、一般が全部利得に均霑する公平は望まれない。一方にのみ與へて他方に與へない厚薄濃淡のあるのが面白いところであるがどちらに轉んでも損をしないのが本國にどぐろを卷いてゐる大財閥である。

彼らは戰爭によつて資本主義の强力的維持、需用の强さに乘ずる戰時の不當に近き利得、通商路の延長による利益の把握、生產餘剩の處分、そんなものゝ總和が肥滿資本家の脂肪となつて一層の血色を善くし肉を附け加へ、戰爭は一直線に富の王國へ導く。

無產大衆にはそんな惠まれた機會がなく飛行機も內燃機關も潛水艦も自力で設計することができないから、ブチブルの指導の下に軍需工場で働き衆ねて高い財閥をより高くするために働く。詰らないといへば詰らない樣だが彼らはこんな大相場に參加すべき證據金を持たないのだ、と、こんな怨嗟的のアツピールを始めると、僕が當節流行の資本主義打倒の假聲を使つてゐるやうだが決してさうではない、何とかして平時においても特に戰時においての利得を公平に分配する方法を讀者とともに紙上で搜索しつゝあるのではないか。

日本に財閥が無かつたら國家今日の繁榮を見なかつたであらうが、同時に財閥が無かつたら今日のやうに思想が矯激にならなかつたかも知れない。財閥の功過の貸借は、よくバランスが取れてゐるや否や、いさゝか檢討を要する。

0

現代では財閥の異常な膨脹とともに時代に特色づけられた現象は、無產者の政治的に法律

的に社會的に集團として確認せられたことで、無產者の生活權擁護運動が事變の終るとともに勢ひづいて現在の進行に速度を加へるであらうことである。

これは威すためにいふのではないが、富豪が國民全部の利益を無視して私腹を肥やすに驀進すれば、大衆は建設維持の穩健から×××の××に向ふことである、事變の後には大衆の力が××に對して×××となることは世界的である。

何とかして高賃銀を支拂つて勞働者の根强い反感を緩和しようとする意旨は十分に資本家の胸中にあるが、それは英國の勞働黨內閣の下に新らしき失敗を演じたことで資本も勞働も國家も、ともにへたばりかけた。組合は勞働者の生活標準を維持するために失業擴大といふ犧牲を拂つたから全體として何の得るところもなかつた。

帝國主義を養ふものは富豪の納稅ではなくして却つて間接稅である、富豪の不當利潤の大部分を消費力の培養に振り向けたならば、國內の經濟事情は餘ほど整理せられるであらうがそれは理想であつて、現實としては國の收入の大部をもつて富豪のために海外市場、海外原料の×××に充てられる。

この弊害の增大するに從つて一種の國家社會主義が擡頭して國粹主義が社會主義と妥協するに到るかも知れない。日本では百圓の郵便貯金を持つてゐるものは自ら無產者とは信じてゐないで小ブルヂョアの誇りを持つてゐるから割合にお目出たい、無產運動の振はないのはそこにある。

ドイツのヒットラー黨が俄然として大を成したのは國民性に合致したためであり日本にも發達する可能性は濃厚であるが、日本の政黨は妙な組合せから成つて、政綱の中には社會政策も國粹思想も何でも包括して平和にも戰爭にも向くデパート式であるから原理的にも實際行動的にも極めて不明瞭なものである。

國家社會主義が行はれたならば富豪の力を破壞して生產手段を國家に委任することになるであらうが、そんな改易をした結果を考へてみると政黨が財閥の代理をするのだから搾取は却つてコムバルソリーになつて勞働者は意思に反した働きでも公然かつ義務的に强要され、解放は理想と終遠くなり、支配者を換へた搾取は今のまゝ進行するであらう。

そればかりではない、國家と國家との間には民族意識が强くなり、生產權が國家に集中す

る結果として統制に利便を與へるから、戰爭は極めて簡單に、そして機敏に行はれることになるであらう。

大騷ぎをしてそんな改革を斷行しても理想が翼を擴げて飛び去つたあとの無產者の幻滅こそ恐るべき自棄行爲を伴ふ。

P

政黨の得手勝手な主張によつて平穩であるべき公衆生活を國家對抗の急激な渦の中に投げ込み、戰爭をして明かな國策上の爭點に立たしめないで超國策の社會活動たらしめることがある。今後の戰爭は動力の過剩と人口の過剩とを消化させる劇藥として使はれるから東洋において戰爭必至の情勢は國民をして暗默の間に認識せしめて、こゝへ國家社會主義の出るのは、萬さら出處を誤つてゐないが、それは大衆の期待してゐるやうな幸福なものではあるまい。

國家社會主義といつても社會主義ではない。國粹主義者からは國賊呼ばはりされるのを回

避し、社會主義者からは搾取私黨といはれる目標をカムフラージしたものであつて、戰爭團體に近いが、社會主義とは全くの別種である。驢馬が散髮を怠つたからといつて綿羊になれるものではない。

生產、分配、交換の手段が資本主義經濟から切離されて國家の管理に移つたら財閥介在の中間はないが同時に勞働者の享ける幸福は議論的內容が充實してゐる割に空虛なものである。歐洲大戰で資本主義政府も資本家に氣兼ねしてゐられないで、敢然として生產、分配、交換手段を國家の强制管理に移したことはあつた、經濟の國家管理、勞働力の國有は資本も勞働も堪へられなかつた。こんな破滅的な非常秩序は戰爭終了とゝもに待つてゐたとばかりに戰前の狀態に還元して國家の强い手は引つ込められた。もし國家管理が理想的なものであつたら暫行的政策が今日にも尙ほ續けられて財閥は姿を隱してゐるはずであつた。

Q

一たび戰爭を經るごとに國家は進步する。國家は戰勝後に衰へた例はあるが、それは驕慢

と怠惰との結果であつて少數の例に過ぎない、戰勝の後には資本主義が確乎たる支配權を植付けるが戰敗の後には恐るべき×××××が擡頭する、破壞的情勢は戰敗後ばかりではなく時としては×××のために戰勝國にすら芽ぐむことがある。

財閥が企業の高下駄をはき金融のオペラハットを敲いて崭然頭角を挺んでてゐるが、公平な富の分配からいへば財閥の蓄財身長が延びるとゝもに課稅尺度がそれ以上に伸びねばならぬ、國家財政の眠つた原則の目覺めを社會大衆が促がしてゐる。

選擧ごとに大衆の投票を掬ひあげる手段として各政黨が社會施設と富豪征伐の旗幟を翻へすであらう。いまに大衆は租稅による勞力の削減——取得累進稅、遺産相續稅、資本稅等々の加重——を要求し始めやう。さうならば經濟界は勞力の集中中樞を失つて國力は氣體となつて消散するであらう。かくして資本家を鋸で引き倒したあとの無產大衆は陰鬱な顏を蒸しタオルで拭つて晴々とした樂土に住めるかといふのに決してさうではない、そこに條件がある、世界全體が×××にになるが、單に日本と×××とだけが×××になるからである。世界が×××××に統一されずして日本だけがさうなつたならば戰敗者のやうに強

國から武力又は經濟力をもつて征服され、國內の財閥に搾取される以上の、何百倍かの力をもつて國外から掠奪されるであらうから、資本財閥の打倒は無產者に取つて溜飲を下げる快はあるであらうが、次いで來るものは更に强き搾取力であるから溜飲は再び吭にこみ上つてくるであらう。

R

手近い例が滿蒙善後策である。日本が滿洲より搾取どころか滿洲に搾取される年月は暫く續くものと見ねばならぬ、大衆は滿蒙に投じた血と金とによつた利益を財閥の獨占に歸せしめてはならぬといふが、滿蒙の利益は今日資本を投じても收穫を十年の後に待たねばならぬから一攫千金の夢を抱いて出かける徒輩は國家の長策を妨げるものである。小中工業に開放しても支那の商工業者と對抗するだけの粘り氣がない、勞働者が出かけて苦力と取組んで賃銀上の勝味はない、屯田制は北海道の開拓に貢獻したが滿蒙でも効果的であらうがその成功は遠い將來のことである。關稅を高くすることは時代錯誤であり日滿間の關稅を撤廢すれば

食料原料は日本に流入して農村、炭坑は先づ破滅する、双方とも荒廢するであらう。從つて日滿を一括的に考へることはできないが別々に切離したならば日本が滿蒙へ進出した効果を稀薄にする。**誰が行つて、どうする、財閥が出かけないで誰が行く。**

日本内地は資源が涸れ果てゝ見る影もないが、アジア大陸には天惠が手をつけずに保存されてゐる。これを歐洲諸國が吸ひ盡のやうに掴り盡された土に比べて、優れた未來に輝き、その地上には低廉な勞働力があつて、しかも未組織であるために弱く、財閥に取つてこない易い組織になつてゐる。

S

金鱗を見つけ出したものは、いつでも無智にして無資産な寒村の樵夫であるが、その權利を安く買收してそこに大仕掛けな機械を据ゑつけて企業化するのは資本家である。

資本の効果は集中によつて強力化し、分配によつて解消する。國際凌轢の中に立つて資本の強力化尖鋭化によつて海外の市場に血路を開いて行くのは利己的から出たものであるが財

閥は國家に對しても相當に靈してゐる。M、M、Sの財閥を國際間に突き出す時は米、佛、英などのそれに較べると、また力が弱いから、國際競爭には、もつと太らせたいと思ふ。日本財閥が大きいといふのは、ほんの國内的だけであつて國際商戰に奮闘してゐる姿は極めて微力なものである、だから日本の財閥も、もつと大きくかつ強くなつてもいゝ。三大財閥もその次の二流どころも合體して一塊となつて、國外に、もつと強く進出してもらひたいものだ。

商業は戰爭でないといふ十八世紀の學者の謬りは訂正されて今では立派な戰爭である。たゞ商戰といふ名において平和的にみられるが、實戰とどこがちがふ。死屍累々たる破産者と廢墟となつてゐる工場は商戰の敗者である。國外のみならず國内においても戰爭は戰はれて中下層は刻々に貧乏化されつゝある。工場に新しく職を求めるものは地方自作農にあらずんば中商工業者が大資本の壓迫によつて家も資本も土地も取りあげられ、裸にされて勞働市場に筋肉を賣りに出たものである。

しかるに日本全體が貧乏になつたかといふに、貧乏になつてはゐない。反對に日本の富は

躍進しつゝある。人口の增加より富の增加率が五パーセント高い。いま五十年前に比してどの地方でも人口は增加しつゝある、それ以上に富は增加しつゝある。生產も增加しつゝあるがそれ以上の率をもつて貧民も增加しつゝある。財閥はそんな危險の對象の中で富を蓄積しつゝある。いろ〳〵の手段でそれを隱蔽してきたが隱蔽し切れないで、それが白日に現實狀態が暴露しかけてきた、財閥は古い手を換へねば××である、ドル買ひといつたことが、どんなに物議の種となつたかを思へば、この上は國內でもうけることを斷念するが賢い。

日本の財閥もこゝまで成長したのであるから國內で餓鬼大將となつてゐるより國外で英米佛の大物を相手に爭鬪して勇を鬪くなら國民は喜んで財閥の存在を認めるであらうし又た後援を吝まないであらう。

T

文化の低い他國に商品を押付けやうとしても、その國は機械を買つても生產品を買はないほど賢くなつた。その中に機械までも自國で製造するやうになつたら、もう購買市場としての滋味を失つてしまふ。最近十年において支那の工業は三百パーセントの大飛躍をした、ブラジルもフヰンランドもポーランドも濠洲もこれに劣らず飛躍した、これらの購買市場は遠からず生產工業地帶となつたら物資は滯積する方であるから、これからは國內で製造したものを他國に賣りつけることが困難であつて、この困難を克服することが財閥の國家奉仕である。

今日の生產と消費との妙な食ひ違ひのまゝで進むことは、破產に通ずる旅程に上つてゐるものかも知れない。たとひ國民の生活費とゝもに生產費を極度に低下して一時を切り拔けても道中の一ふくに過ぎない、相手方のない取引は、いくら安くしても賣れるものではない。

海外の市場も前途の見透しがついた、購買力のある國は購買力以上の生產力を持つてゐるし、未開國は購買力が少くして貿易の逆調を防ぐため國產品愛用主義を鼓吹してゐるし、野蠻地では文化品を買はない。かやうに外國市場を斷念したら內地市場はどうかといへば尙更ら悪い、資本家が勞働賃銀を引下げ、物價を高め、失業させ、貧困に陷れて、それに向つて生產品を買へと迫つても仕方がないではないか。

U

こゝに卑近な例をあげる、經濟學の入門だと笑つては困る、笑つても別に差支えはないが——織物工場がある、流行に投ずる意匠はお互に秘密を守つてゐるものである、同じ一ヤルドの織物でも柄によつては五圓ともなり六圓ともなるが嗜好に投じなかつたら原價の三圓でも賣れないとする、工場は冬物を夏に織つて時季を見計つて九月に市場へ出す、この時に秘密にしてゐた意匠が始めて明るみに出るのである。

甲の意匠が乙より優つてゐた時は乙の資本家は損をするが工場に働いてゐた勞働者は自分らの賃ではないとして賃銀を値下げして損失を分擔するものではない。丙の意匠が甲と同じものであつたとしたら、双方ともに嗜好に投じてはゐるが生産過剰であつたら、甲の獨占利益を許すものではなく丙から求められた競爭を甲は逃げることができないで安く賣るから甲乙丙はともに損をする。

甲の製品が意匠も善く競爭のない稀少性價格を持つたら資本家はもうけるであらう。その

時に勞働者が資本家の搾取を罵つても、前の場合のやうに資本家が損をした時に損失を分擔しなかつた勞働者が、大もうけをした資本家に分け前を迫る權利はない。

もうけさせると、もうけさせないとは資本家の力でも勞働者の力でもなくして社會の力である。どんな事情の下においても損得は不合理で、社會大衆が不用意の中に生産物の損益決定權を握つてゐる。

手工業時代には生産高が少なかつたから餘り經濟法則が手きびしく働かなかつたが機械が大量生産するやうになつてからは思惑が一たび外づれたら工場は破産し勞働者は失業にまで投げ出されるが、その製品が賣れないものかといへば、必らずしもさうではない。

賣れないで困つてゐる製品を大百貨店が一手に買占めてわけもなく消化させてしまふことがある。彼れは大きな市場を持ち、又た劣等品でも優等品のやうに思はせるだけの信用を持ち不用品でも必需品のやうに、流行おくれでも流行の尖端ものゝやうに宣傳するだけの力を持つ。死んだものでも大資本の息を吹きかけたら踊り出す。

V

十人の九人までが購買力を失つて貧困を訴へてゐるところへ百人でも使ひ切れないほどの生産品を面前に積上げるのであるから物資は潤澤ではあるが分配組織の厚硝子を隔てた美酒佳肴であつて貨幣を介して交換するにあらざれば、手に入れる途は一つしかない、それは×を破つて×むことである。

物資は生活の必要と別々になり食料は腐敗させても胃袋へ入つて來ない、貨幣を持たないものは消費市場から締め出される。働かれば食ふべからずが原則であつても原則だけでは生活はできるものでなく原則が實地に働いて始めて生活ができるのである、**働く途はなくとも人類は消費を要する。**

動力は勞働力に代つて、將來にいくら好景氣が訪づれてきても勞働力に戻つてきてもらふ必要はなくなつた、なぜならば企業家は勞働力ほど高いものはなく動力ほど安いものはないことを知つたからである。どうしたら勞働力を減じて生産高を高めることができるかとは工

場の能率技師に課せられた宿題であるから、技師は企業資本家に忠實なる考へとしては、動力を多く使用して勞働者を馘首せねばならぬことである。

勞働力を要する仕事が漸次に減少してくるのは經濟界の新現象であつて、消費を要することは昔から今まで、今から未來まで一貫して變らない鐵則である。

手工業時代は幸福であつて、供給が需用と調子を合せてゐたが、現代の生産は大衆から搾取を續けて貧乏線から突落として飢餓線に立つてゐるものに向つて尙ほ生産を續けてゐる。今日及び今日以後の生産ぶりでは市場として地球は餘りに狹く人類は餘りに少い、人類が少いのではなく購買力を持つ人類が少いのである、國内に溢れた商品と國外からくる商品とが押し押されて輸出入が平均したら餘剰はない。

W

柑橘栽培業者が妻を娶つた話がある、妻を娶つた目的は人糞肥料を得るにあつたからこの結婚は間違つてゐなかつた、なぜならば妻は必らず用便しないではゐないからである。しか

し結果は面白くなかつた。

妻は食物の消費に比して排泄物の生産量が少かつた、これが昔の經濟情態であつたが今日では生産が多く消費が少く、消化不良で機械が生産をこなすだけの消費を呼ばない、全く彼女の製肥術を逆に行くものである。

財閥も收入が多くして支出が少いからその差額は柑橘を肥やさない、貧民層はその反對をやつて財閥を肥やす。

利權漁りの政治家は近頃は一向景氣がよくない。利權らしい利權は一括して領袖の手から財閥にさらはれるからで、代議士になつても利益的に張合ひがないわけであるが、そんな張合なんかは有つてはたまらないが、どちらにしても國民は迷惑する。

財閥は獨占はあつても割合に暴利を貪つてはゐない、暴利を貪つたのは財閥が今日のやうに固い基礎を築きあげなかつた以前のことで、今日の財閥は堅實一天張りであるから財閥系の銀行會社の利益は六朱を出ない——八朱一割の配當は積立金を合せた資本から出る——他の株式會社個人商店の方が却つて暴利を貪つてゐる。

生産は自動車で走り飛行機で飛ぶ、消費は驢りながら追つ掛ける、財閥御用の經濟學者は驢りのお腎を鞭つて前進を續けさせても六朱を出ない。

X

勞働時間數又は勞働能力を尺度として測つたものが調帶の回轉數によつて測定される時代に經濟學者の意見は少々の訂正では間に合はない。その學說は生産謳歌で人間生活の否定であるから動力の前ではその說は化石である。世を擧つて秋風落莫の中に財閥だけは華を咲かす、實を結ばない狂花ではなからうか。

貧乏を根絶して全國民が皆財閥になつたら申分はあるまいが、それでは財閥といふ特異性がないし又たそんなことはできることではない、なぜならば財閥といふものは貧民層の上に建つ樓閣なのである。

機械よ、勝手に生産しろ、人間よ、勝手に消費しろ。二つの間に聯絡がなく、却つて矛盾がある。その中間に寄生して兩者を操つて太つて行くのが金融財閥である。

機械が人間に勝つて社會が統制を失つた、そこに現はれたものは寡頭金融財閥ばかりと思つてはならない、多數の貧乏人も亦たそれの産物である。

機械と××とは世の中を荒廢せしめるが、**××は貧乏に對して責任感念がなく機械も消費調節に對して責任を負はぬ**、血と涙との通はないところと、觸つても冷たいところは××と機械と共通である、非人格的で節制のないところも相似てゐる、財閥の自家辯護の呼び聲は油の切れかゝつた機械の軋る音に似通つてゐる。

こゝまで、嫌やな結論をつけるところまで讀者を引つぱつてきたが、僕はこゝで明かに結論をつけることを遠慮しやう。併し現下の日本の國是としては無産階級と財閥とを並べて國際的共同戦線に立つてもらひたいと思ふ。いま國外に向つて力と金とで突つ張らねば國際的攻撃に對して日本が凹む、だから好きだ嫌ひだと贅澤をいつてゐる時ではない、國難を前にして喧嘩もしてゐられない。喧嘩の話なら後でゆつくり聞かう。

その七　馬と電氣と戰爭

A

君は落雷を見たことがあるか。ないつて。僕は見た、それを話さう、愛宕山の一夜を想ひ出してみやう。愛宕といつても東京の低いあれではない京都の高いそれだ。

かつて天狗を宿めたといふ大きな檜——杉ではなかつたが——蘇東坡が「根は九泉に入つて曲處なし」と吟じた十圍もある老いた檜なのだ。ぱり〳〵つと響いたとともに紫電一閃！マグネシユームを燃やした寫眞班の一齊スナツプのやうな——あんな小さなものではない、もつと強く想像してくれ給へ、とても凄いところが想像できないかね、困つたね。まあいゝ。

その紫電が一山を震慴させて檜に落ちた、鼓膜が裂けたと思つたが無事であつたことを祝福してくれたまへ。翌朝それを見たらどうだ君！その太い高いやつが捻ぢ切られて堀起され

てゐるのだつた　人間の力なら十人が一ケ月もかゝるやうな破壞を一瞬間にやつてのけて、あとは晴天白日で知らぬ顏をしてゐる、その雷の正體といふのは電氣といふから驚くよ、**雷といふものは破壞するだけで善後策に對して何の考慮を拂つてゐない、**少し責任感念のあるものにはできない亂暴だ。

その電氣が太平洋の向うで雷鳴をやると日本は曇りだ、日本人にビリ〳〵つと感じるほどワシントンの電氣は强力なのだが、今では科學のために人間が雷の代りに飛行機を使ふ、重爆が落雷の代用だ。こやつは狙ひをつけて落とすのだから雷のやうに氣まぐれに深山の植物を打倒して自ら快としてゐるやうな超世間のものではない、君や僕などが群集してゐるこの都會のその頭上から見舞ふのだよ。

平時でもたゞ商敵を撃退したり降伏させるだけではない、根こそげ掘りかへすのだ、屠殺だ。

B

電氣は動力となつて機械に魂をつける、動力の行くところには恐慌と失業とが殘る。米國は戰術として電氣を攫んだ、歐洲人は始めのうちこそ米國の電氣に對して默つて冷やかな微笑をもつて酬いてゐたが、一つの新らしい機械が造られるごとに十の悲しむべき現象が發生して、**それの堆積がつひに今日の飢餓世界を展開した。**生產物は堆積してそれを買ふべき金がない、美人が金持ちのおやぢに抱かれて眠り、駿「馬」痴漢を乘せて走るといふ變態世界である。

C

君は支那馬に乘つたことがあるか、僕は痴漢が背馬に乘つた經驗を持つてゐるのだ。支那では南船北馬といつて南方には沼澤河湖が多いから船で旅行するが、北方は平原山岳であるから馬背で行くのが便利なのだが、支那人は歐米人に搾取される腹いせに馬から搾取するから馬は背せて倪黃の山水畫のやうに骨が突兀として乘り心地が惡い。

南の方の南京で畫舫に乘つて玄武湖へ出やうとしたが國民政府が、あの有名な秦淮の運河

に畫舫を通じさせないほど兩岸を埋めたから僕は馬車で出かけることにしたが、支那馬の意地の悪いのに驚いた。

孝陵附近に少しの高低がある、坂路にさしかゝると馬はぐる〳〵と廻るばかりで決して進まうとしない。お客が降りると眞直に進むがお客が乘つたら横にねぢれて馭者がいくら鞭をあてゝもぐる〳〵廻りをやるだけだ、君！日本の馬を想像してはいけない、日本の馬は支那のそれに比べたら猛獸だ。

支那馬はおとなしいが、つむじ曲りのものだから僕を乘せないのだ、馬まで排日をやるのだ。

戒嚴令が布かれてゐたから辻々には衛兵がピストルを突き出す、今日の衛兵は昨日の苦力であり一昨日の匪賊であるから馬より恐ろしいものである。馬と衛兵に脅かされながら城壁を出て場末の細い巷へ出て、そこで、君、とう〳〵馬車が顚覆したのだ。

その邊は回々教徒（淸眞教）の集つてゐたところで僕はそれらの人に扶けられて一日を油くさいところに暮した、その邊はアンペラを組んで生活してゐるところだつた。

こゝでちよつと論文を挿む。

D

支那の手工業は主人と被傭者との相互依存主義であるが、廣東上海あたりで突として起つた勞働組合は雇者に向つて革命的挑戰を起した、勞働者の一部は支那の舊制度から反逆的に離れて行つた。

外國歸りの學生によつて指導せられ、官憲の禁壓を排除して潛行的に蔓延しつゝある。これまでの運動は、ロシア革命より古い歴史を持つてゐたにかゝはらず無方針で騒いでゐたのであつたが最近ではソビエートの受賣りで、實行の可能と不可能とは別問題としては彼らは理想的のスローガンを掲げて旗幟を鮮明にした。

運動は北方より南へくるほど盛んで、廣東、上海を除いてみるべき團體はないが雷同者の澤山を持つ勞働組合に、未組織のものでも一呼して合流させる勢ひを持つてゐる。共和制を布いた今日では立派に政治的に合法的に動けるはずであるが頑固な傳統が共和制の實際の

運用を拘束して昔ながらの專制治下の民俗を脱してゐない。

E

支那を混亂させる因素は十指を屈することができる、學生運動もその一つである。

日本のインテリは國際協調思想を持つてゐるから愛國心が薄いといはれるが、支那のそれは愛國心が強いともいへるし、エゴイストであるともいへる、どちらにしても**世にもうるさいものは、支那のインテリである。**

日本が強國の列に躍進したその秘訣を習得しやうとして支那は三千の學生を日本に送つたが、これは學問的スパイに過ぎなかつた上に、日本の教育者が指導方法を誤つたために本國に歸るや直ちに猛烈な排日運動の首唱者となつた、彼らは日本に留學して備に日本の弱點と缺陷とばかりをみて歸つたのである。

日本に學ぶより日本の先生である米國に學ぶことが日本を乘り越し得られると考へるやうになつてから今日では米國に學ぶものが多くなつた、**米國で學んだものは崇米家となり日本**

で學んだものは侮日者となり、ともに排日に合流する。

支那における高等學府もこれに負けてはゐなかつた、或はそれ以上の惡性であるともいへる、大學は排日の巣窟であり教育は治安に害のあるほど左傾してゐる。

F

さらに在支外國人の利害が錯綜して日、露、英、米、葡、獨、佛といふ順序に四十萬の勢力がバラ撒かれてゐる、四億八千に對する四十萬は物の數でもないやうであるが、その資本機關、勢力は支那全體を混雜させるに十分である。

支那の思想は輸入ものが多く、三民主義といへども孫中山の創造物とはいへない、三民主義に助言するものにソビエートがあり、英國式の國家主義に反抗する民族主義がある。搾取階級の軍閥があり、搾取軍閥と財閥と帝國主義列强とを合せて攻擊する國民運動がある。

運動に秩序統制がないため外國の干渉を招いて支那人自身が支那全土を擧げて世界列强の角逐場として提供してゐる、戰爭を招くものは支那人それ自身であるともいへる。

G

支那は國家として自給自足ができるやうに、支那の社會組織そのものが自給自足である。これは印度でも同じことであるが、開港場から五十マイル以上も離れた田舍へ行つてみたまへ、そこに支那の本當の平和な生活が展望される。

溝渠がある、その兩側には自然の堤があつて楊柳や楡が生えてゐる、晩春には楊花が風なきに飄々として空に舞つてゐる。緩く流れる水勢に任せて船がゆる〳〵と行く、堤の上に細い道があつて一輪車が辛うじて通つてゐるところもあり、軍用に徵發――或は掠奪――されたあとには車も牛も馬もない、人間の肩が車となり牛となり馬となつて荷物を運ぶ、荷物を運ぶといつても交通が狹範圍に限られてゐるから一日程か、多くも三日程を出ないであらう見渡す限りの廣野の中に生れたものは一生のうちに海も山も知さないでこの世を去つてしまふ。

排日とか愛國運動とかを叫んでゐる青年は一部富裕な家の子弟で、開港場で孵化して一種

族に過ぎない、そんなものは支那大衆の實際生活の對岸にある。

彼らは苛稅も經濟侵略も餘り氣にかけてゐないユートピアンのやうにみえる、運命に逆はない哲人のやうである。

かやうな支那人を相手に抗爭することは、抗爭するもの〻心理が、自實なくしては說明できないであらう。

馬車の顚覆から支那のことを長く書いた、「馬と電氣と戰爭」との元に還らう。

H

人間は自分より智慮の低い牛馬を使つた、機械を腕で動かした、つひには動力を使ふに到つて、人が動力を使ふか動力が人を使ふかの區別がわからなくなつた。馬の力をもつて何馬力と數へるが、馬はたゞ單位計算に用ゐられるだけで馬の効用は電氣文化ガソリン文明に驅逐されてしまつた。

Tool は腕の延長であり機械は道具の延長であり、動力の魔手は太平洋を越えて南洋を掻き

廻はすほど長く、競爭に迫車づける力の强さは驚くべきものがある。動力は排他的であるから共存共榮の原則を無視して掴りかへす、弗帝國主義を進展せしめるに打つて付けた前軍である。

科學と機械とは平行的に直線に進んできた、その兩側には人間の勞働力を排置して操縱せしめたが、動力は機械を非字形、梯子形に組織換へをして主要機械の兩側には補助機を排置して自働的裝置として完全に人間を排斥してしまつた。人間の便宜のために造られた機械が機械の便宜のために人間を餓えしめた、馬が尾を掉るのではない、尾が馬を掉るのだ。物が心を支配するのだ。

馬の臀が騎手の頭より高いのは變態だが、鵯越えの逆落しに勾配の急なのを形容して「馬臀人頭より高し」と山陽外史は名句を吐いた。

騎兵は敵の弱點へ味方の勢力を急速に集中せしめる用兵上の効果はあつたが滿洲事變でも自動車がこれに代るやうになり、高粱の陰にかくれてゐる馬賊も飛行機から爆彈を降らされては逃げ路もなくなつた。

人間生活には飲食と住居と光熱と被服と文化との五種を條件とする割合に贅澤なものであるが馬は食物のみで濟む簡易生活である、食物の不足した時が馬の不景氣で秣が前に積み上げられた時が馬の好景氣である、その上に馬にはいゝ事がある、それは貨幣のないことである。

馬には貨幣がないから直接に草を食つて行けるが人には貨幣があるから必要以上に山積せられた滯貨を前にして貨幣の媒介なくしては食ふことができない、食ひたくとも購買力がないから買へないのである。ソビエートの貨幣否認主義は馬の主義であつて人の主義ではない製品に食傷してしかも分配されないのが資本主義である。

空腹な馬の目の前に堆積した秣があつて、それを食はさないで無暗に臀に鞭を中てたならば馬でも人間に抵抗する、人でも馬でも正しい分配がなくては、しまひには支配階級のいふことも聽かなくなる。

科學の計算では動力の使用によつて大量生産で安いものが着られ安いものが食へるはずになつてゐるが、それが反對に意外に高いものを著たり食つたりしてゐるのである。收入の一尺と支出の一尺とが並行して伸びて行くのではなくして收入がそのまゝで支出が倍に伸びたら生活は半になり、收入が半分に縮んで支出が倍に伸びたら四分一になり、支出がそのまゝでも半分になつても失業して收入が無くなつたら零になる。政治家は下層生活のアッピールなど馬の耳に風である。

感じてゐるやうであり感じてゐないやうでもある、たとひ感じてゐてもそれの對策を講じないで、風は馬の耳を支配するが馬の耳は風に命令することができないといふ。生產と消費とが交互に假裝敵となつて、米國の軍艦が現在のまゝで日本が半分縮めたら米國はそのまゝ二倍になつたわけである。

馬を論ずるに耳をもつてするのは誤つてゐる、何となれば耳は馬の價値を高めること能はず、馬はラヂオでニュースを聽いて駈け出すものでないからである。馬の價は脚である、耳は長くとも角ではない。角は牛の武器になるが頭に膠着して動かせない、牛が角を動かす能

はず人が耳を動かせないことを冷笑して、自分だけは耳を動かせるのを自慢したらそれは馬の馬鹿である。

「

脚が尊ばれるのはスピードに在る、鶴の脚は長しといへどもこれを切れば必らず悲しみ鳧の脚短しといへどもこれを續き足したら必らず憂へるといつた意味の文を莊子で讀んだことはある。人間は馬の脚の長さを利用することを知つて馬の耳を認めない。耳は休息することはないが脚は休息の必要がある。人でも馬でも休息といふ不經濟な病的症狀がある、しかるに機械は休まない、その上に秣を要しない。

秣を馬に與へるのは人が馬の胃袋に對して慈善作用を行なふのではない、馬の脚を驅使しようとする利己心からの僞善行爲であつて、馬の舌も胃袋も必要ではないから、口も舌もなくして、たゞ脚だけが働いてくれたら百パーセントである。尾も耳も口も舌も眼も不用なものであるが、そんな不用なものと入用な脚とを組立てゝ一つの馬を構成するから入用なもの